

恒武西宮遺跡 6

Tsunetake-nishimiya Site
The 21st Excavation Report

浜松市教育委員会

2018年10月

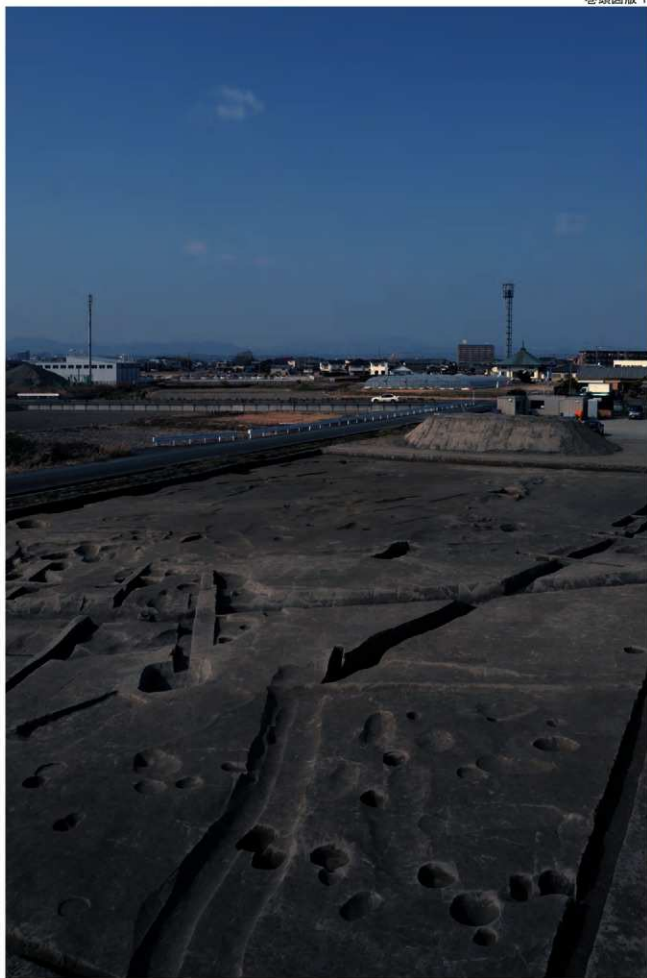
Hamamatsu Municipal Board of Education, October, 2018



恒武西宮遺跡6

2018年10月

浜松市教育委員会



V区全景 南東から



V区 SP83 土師器甕出土状況 西から





V区 SK18 土師器高坏出土状況 北西から



V区 出土遺物

例 言

- 1 本書は、静岡県浜松市東区恒武町における恒武西宮遺跡 21 次調査にかかる発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、株式会社スズケイの物流センター新築工事に先立ち実施した。発掘調査は浜松市の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市市民部文化財課が補助執行）のもと、株式会社島田組中部営業所が実施した。調査にかかわる費用は全額株式会社スズケイが負担した。
- 3 調査にかかわる期間は、以下の通りである。
委託期間（現地調査）平成 29 年 12 月 11 日～平成 30 年 3 月 16 日
（整理作業）平成 30 年 5 月 31 日～平成 30 年 10 月 31 日
- 4 現地調査は、山中美歩（浜松市市民部文化財課地域遺産グループ）・和田達也（浜松市市民部文化財課埋蔵文化財グループ）の指導監督のもと、安孫子雅史（株式会社島田組文化財事業本部調査室）・河本匡人（株式会社島田組文化財事業本部工事事務部）・瀧口泰孝（株式会社島田組文化財事業本部調査室）が実施し、以下の方々の協力を得た。
森下哲也・藤田恭平・下釜あや（株式会社飯田組）、山崎進一（株式会社リンク）、鈴木寛貴（浜松カメラ商会）、西岡正行（株式会社アイランドプライダグ映像制作部）
- 5 整理作業は、山中・井口智博（浜松市市民部文化財課埋蔵文化財グループ）の指導監督のもと、安孫子・萩原美香（株式会社島田組文化財事業本部調査室）が行った。
- 6 本書の執筆は第 1 章 1 調査に至る経緯・4 恒武西宮遺跡の調査歴・第 4 章 総括を山中、第 2 章 4 出土遺物を萩原が行い、その他を安孫子が執筆した。
- 7 本調査に関する資料は、浜松市地域遺産センターで保管している。
- 8 本書で報告する遺構の略号は下記の通りである。
溝:SD 土坑:SK・SX 掘立柱建物:SH 小穴:SP
- 9 本書で報告する土器の断面と、種別の関係は以下の通りである。
須恵器  土師器 

目次

巻頭図版

例言

第1章 序論	1
--------	---

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
3 地理的環境・歴史的環境	4
4 恒武西宮遺跡の調査歴	7

第2章 調査成果	9
----------	---

1 予備調査の結果	9
2 基本層序	10
3 検出遺構	11
4 出土遺物	38

第3章 後論	49
--------	----

1 溝状遺構の時期について	49
2 掘立柱建物の時期および小穴群の組み合わせ	51

第4章 総括	52
--------	----

1 古墳時代中期	52
2 古墳時代後期	53
3 恒武西宮遺跡の性格	54

遺物観察表	55-60
-------	-------

図版

報告書抄録

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 V区全景 南東から
- 2 V区 SP83 土師器甕出土状況 西から
- 3 V区 SK18 土師器高坏出土状況 北西から
- 4 V区 出土遺物

図 版

- PL. 1 1 調査区全景 直上から
- PL. 1 2 V区 掘削状況 南西から
- PL. 2 1 I-A区 完掘状況 西から
- PL. 2 2 I-B区 北側完掘状況 南西から
- PL. 2 3 I-B区 完掘状況 北西から
- PL. 2 4 I-C区 完掘状況 西から
- PL. 3 1 I区 SD30 掘削状況 北東から
- PL. 3 2 I区 SD30 断面状況 北東から
- PL. 3 3 I区 SD30 遺物出土状況 東から
- PL. 3 4 I区 SD43 遺物出土状況 北西から
- PL. 4 1 II区 1面目遺構完掘状況 北西から
- PL. 4 2 II区 基本層序 西壁 東から
- PL. 4 3 II区 SP05 断面状況 西から
- PL. 4 4 II区 SP13 断面状況 南東から
- PL. 5 1 II区 SP02 断面状況 南東から
- PL. 5 2 II区 SP03 断面状況 南西から
- PL. 5 3 II区 SP04 断面状況 南から
- PL. 5 4 II区 SD22・23 断面状況 東から
- PL. 5 5 II区 2面目遺構完掘状況 南東から
- PL. 6 1 III区 1面目全景 北東から
- PL. 6 2 III区 1面目全景 北西から
- PL. 7 1 III区 SD05 掘削状況 南東から
- PL. 7 2 III区 SD05 遺物 (21・26) 出土状況 南西から
- PL. 7 3 III区 SD05 遺物 (25・20) 出土状況 北東から
- PL. 7 4 III区 SD05 断面状況 南東から
- PL. 7 5 III区 SD 5 遺物 (23) 出土状況 南西から
- PL. 7 6 III区 SD08 断面状況 北東から
- PL. 7 7 III区 SD07 遺物 (28) 出土状況 南東から
- PL. 8 1 III区 SH02 完掘状況 東から

PL. 8	2	Ⅲ区	SP06	断面状況	東から
PL. 8	3	Ⅲ区	SP07	断面状況	東から
PL. 8	4	Ⅲ区	SP08	断面状況	東から
PL. 8	5	Ⅲ区	SP10	断面状況	東から
PL. 9	1	Ⅳ区	全景	北東から	
PL. 9	2	Ⅳ区	全景	西から	
PL. 9	3	Ⅳ区	SD11	遺物出土状況	北西から
PL. 9	4	Ⅳ区	SD11	土層断面	北東から
PL.10	1	V区	全景	南東から	
PL.10	2	V区	基本層序	西壁	東から
PL.10	3	V区	SD47	掘削状況	南西から
PL.11	1	V区	SD47	断面および耳環出土状況	南西から
PL.11	2	V区	SD47	耳環(128)出土状況	南から
PL.11	3	V区	SD47	石製模造品勾玉(127)出土状況	南から
PL.11	4	V区	SD47	遺物出土状況	南から
PL.11	5	V区	SD47	遺物出土状況	西から
PL.11	6	V区	SD47	須恵器塵(124)出土状況	南から
PL.11	7	V区	SD47	遺物出土状況	南西から
PL.12	1	V区	SD47(B)	断面状況	西から
PL.12	2	V区	SD47(A)	断面状況	西から
PL.12	3	V区	SD45	土師器片出土状況	北東から
PL.12	4	V区	SD45	断面状況	北東から
PL.12	5	V区	SD45	掘削状況	北東から
PL.13	1	V区	SK36	土師器甕(61)出土状況	西から
PL.13	2	V区	SP83	断面状況	西から
PL.13	3	V区	SP83	土師器甕出土状況	西から
PL.13	4	V区	SP83	土師器甕出土状況	南から
PL.13	5	V区	SK18	土師器高坏(54)出土状況	西から
PL.13	6	V区	SD74	断面状況	西から
PL.13	7	V区	SD74	完掘状況	南から
PL.14		I区		出土遺物	1
		I区		出土遺物	2
PL.15		Ⅱ区		出土遺物	1
		Ⅱ区		出土遺物	2
		Ⅲ区		出土遺物	1
PL.16		Ⅲ区		出土遺物	2
		Ⅲ区		出土遺物	3
PL.17		V区		小穴・土坑出土遺物	1
		V区		小穴・土坑出土遺物	2

PL. 18	V区	小穴・土坑出土遺物	3
	V区	土坑出土遺物	1
PL. 19	V区	土坑出土遺物	2
	V区	土坑出土遺物	3
	V区	SD47 出土遺物	1
PL. 20	V区	SD47 出土遺物	2
	V区	SD47 出土遺物	3
PL. 21	V区	SD47 出土遺物	4
	V区	SD47 出土遺物	5
PL. 22	V区	SD47 出土遺物	6
	V区	SD47 出土遺物	7
PL. 23	V区	SD47 出土遺物	8
	V区	SD47 出土遺物	9
PL. 24	V区	SD52、SD56 出土遺物	
	V区	遺構外出土遺物	1
	V区	遺構外出土遺物	2
PL. 25	V区	遺構外出土遺物	3

図表目次

挿 図

Fig. 1	調査対象地の位置	1
Fig. 2	調査区的位置 (S=1/10000)	2
Fig. 3	遺構検出状況	3
Fig. 4	SD47 調査状況	3
Fig. 5	現地説明会状況	3
Fig. 6	恒武西宮遺跡周辺の遺跡分布図	5
Fig. 7	17次調査位置図 (S=1/2,500)	9
Fig. 8	土層柱状図 (S=1/100)	9
Fig. 9	基本層序柱状図 (S=1/40)	10
Fig. 10	遺構配置図 (S=1/500)	11
Fig. 11	I区遺構配置図 (S=1/150)	13
Fig. 12	SD36・91・42・41・43平面・断面図 (S=1/80)	14
Fig. 13	SD30平面・断面図 (S=1/30)	14
Fig. 14	小穴平面・断面図 (S=1/20)	15
Fig. 15	土坑平面・断面図 (S=1/30)	17
Fig. 16	II区確認遺構配置図 (S=1/50)	18
Fig. 17	SH01・SA01平面図 (S=1/40)	18
Fig. 18	SH01各柱穴平面・断面図 (S=1/30)	19
Fig. 19	SD01・02平面図 (S=1/30)	20

Fig. 20	SP25・SD21・22・23 平面・断面図 (S=1/30)	21
Fig. 21	Ⅲ区確認遺構配置図 (1/100)	22
Fig. 22	SH02 平面図 (S=1/80)	23
Fig. 23	SH02 断面図 (S=1/20)	23
Fig. 24	SP17・12・15・18 平面・断面図 (S=1/20)	24
Fig. 25	SK02・03・05・SX02 平面・断面図 (S=1/30)	25
Fig. 26	SD05 平面・断面図 (S=1/40)	26
Fig. 27	SD03・08・09・10・12・13 断面図 (S=1/30)	27
Fig. 28	Ⅳ区確認遺構配置図 (S=1/50)	28
Fig. 29	SD11 平面・断面図 (S=1/30)	29
Fig. 30	V区確認遺構配置図 (S=1/250)	30
Fig. 31	SP83 平面・断面図 (S=1/20)	31
Fig. 32	V区南東部小穴群 (S=1/100)	31
Fig. 33	小穴群各遺構平面・断面図 (S=1/30)	32
Fig. 34	SK11・SK18・SK32 平面・断面図 (S=1/30)	33
Fig. 35	SD45 平面 (S=1/60)・断面図 (S=1/20)	34
Fig. 36	SD47 平面図 (S=1/100)・断面図 (S=1/40)	35
Fig. 37	SD51・SD52・SD56 平面・断面図 (S=1/30)	36
Fig. 38	SD74 平面図 (S=1/200)・断面図 (S=1/40)	37
Fig. 39	I区出土遺物	38
Fig. 40	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区出土遺物	39
Fig. 41	V区小穴群・SX 出土遺物	41
Fig. 42	V区小穴・土坑出土遺物	42
Fig. 43	V区 SD47 出土遺物 (1)	43
Fig. 44	V区 SD47 出土遺物 (2)	44
Fig. 45	V区 SD47 出土遺物 (3)	45
Fig. 46	V区 SD45・52・56・遺構外出土遺物	47
Fig. 47	恒武西宮遺跡 21 次調査主要遺構配置図 (S=1/500)	50
Fig. 48	小穴群配置案 (S=1/250)	51
Fig. 49	古墳時代前期・中期の様相 (S=1/4000)	52
Fig. 50	古墳時代後期の様相 (S=1/4000)	53

挿 表

Tab. 1	恒武西宮遺跡調査履歴一覧	7
--------	--------------	---

第1章 序論

1 調査に至る経緯

遺跡の概要 恒武西宮遺跡は、浜松市東区恒武町から貴平町にかけて立地する、古墳時代から中世の集落遺跡である。周辺には山ノ花遺跡、恒武西浦遺跡、恒武東覚遺跡が分布しており、これらの遺跡を含めて恒武遺跡群と呼ばれる。これまで恒武遺跡群で行われた調査では、古墳時代前期から戦国時代までの遺構や遺物が発見されている。各遺跡の調査結果を見ると、恒武西宮遺跡では、古墳時代の方形周溝墓や掘立柱建物跡、自然流路、戦国時代の区画溝、掘立柱建物跡などが検出されている。また、恒武西宮遺跡の北に位置する山ノ花遺跡では、大型の自然流路（恒武大溝）が検出されており、大溝からは古墳時代中期の木製祭祀具、滑石製模造品など、祭祀関連の遺物が豊富に出土している。

恒武遺跡群の北の笠井町周辺にも、笠井若林遺跡、笠井西浦遺跡などの遺跡が分布している。笠井地区では、これまでの調査で奈良・平安時代を中心とした遺構や遺物が確認されている。笠井地区から恒武地区にかけて遺構の変遷を見ると、古墳時代には恒武地区で遺構や遺物が多く確認されるが、奈良・平安時代からは笠井地区で複数の遺構が検出されるようになり、集落の中心が移り変わっていることが伺える。これらの調査結果から、恒武地区は、古墳時代に地方の有力な首長層との関わりが強い地域であり、古代には集落の中心から外れるが、戦国時代には再び集落が広がり、現在の地割の原型となる区画が形成された地域と捉えられる。

開発計画の浮上 2017年、恒武西宮遺跡の範囲内において、株式会社スズケイの物流センター建設事業が計画された。このため、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）は、2017年3月27日～29日に予備調査（17次調査）を実施した。調査の結果、当該地に古墳時代の遺跡が残存していることを確認した。

本発掘調査の実施 予備調査の結果を受けて、事業者と浜松市教育委員会が事前協議を行い、開発対象地の本発掘調査を行うことを決定した。実務は浜松市から業務を委託した株式会社島田組が実施した。現地調査は2017年11月15日～2018年3月20日に行った。調査面積は1704㎡である。

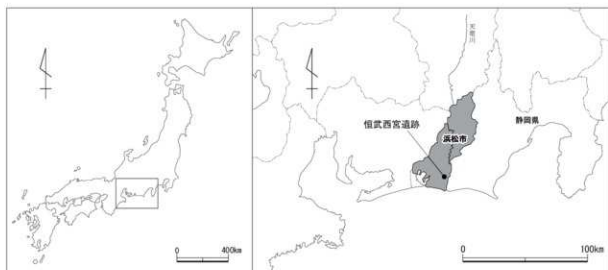


Fig.1 調査対象地の位置

遺構精査 遺構の検出は鋤簾を使用した。遺構検出面は概ね黄褐色を呈するシルト質であるため、比較的容易であった。遺構内の調査は埋土の状況を確認するため、小穴は半截し、溝状遺構は横断、土坑状遺構は縦断に土層観察用セクションベルトを設定し、埋没状況の把握に努めながら調査を行い、土層断面図を作成した。また、出土した遺物については、重要と思われるものについては取り上げ番号を付し、取り上げ地点の記録を行った。また、特に重要と思われるものについては出土状況図を作成した。

記録の作成 遺構の平面図および断面図、前述した遺物の出土状況図はトータルステーションを用い、CADソフトを用いて図化を行った。20分の1を基本として作図し、必要に応じて10分の1、40分の1などの図面を作成した。

21次調査の経過 2017年12月11日からⅡ区・Ⅲ区・Ⅰ区の順で表土掘削を行った。遺構検出は比較的容易であったが、年内に終了するには時間的ロスを極力少なく調査を行う必要があった。そのため、複数の調査区を同時進行的に調査した。2面調査を行う必要のあったⅡ区・Ⅲ区を優先して行い、Ⅰ区に関しては余裕ができたときに調査を行うこととした。Ⅱ区では掘立柱建物を、Ⅲ区では掘立柱建物と古墳時代の溝を確認した。2面目の調査を行ったⅡ区・Ⅲ区のうち、Ⅱ区では小穴と溝を確認したが、Ⅲ区には遺構が存在しなかった。

Ⅱ区とⅢ区の2面目の調査のため、再度重機による掘削を行った後、Ⅳ区の表土掘削を行い、古墳時代の溝を確認した。この溝はⅢ区で確認したものの続きである。Ⅰ区でも、古墳時代の溝を確認した。南側で確認したものはⅢ区で確認したものの続きで、北で確認したものは、翌年にⅤ区で確認したSD47の続きである。北側で確認した溝は複数段階のものが存在し、調査最終日前日12月26日にその本体を確認し、翌27日出土状況写真・出土状況図を作成して完掘した。

そのうち完掘写真撮影・実測の補足を行い今年の調査を終了した。尚、12月25日からⅤ区の表土掘削を開始した。翌年1月9日より調査を再開し、翌日に表土掘削を終了した。遺構検出を行った結果、調査区の中央南寄りに北東から南西方向の溝を確認した。また、その周辺には複数の土坑状遺構が確認できた。



Fig.3 遺構検出状況



Fig.4 SD47 調査状況



Fig.5 現地説明会状況

しかし、西側と東側は非常に不明瞭であったため、少しずつ人力による掘下げを行った結果、多くの部分に攪乱が存在することが判明した。西側については速やかに人力で掘削を行った。また、東側については、重機の届く範囲で再度掘削を行い、攪乱の除去に努めた。その結果、南東隅に小穴を集中して確認した。

中央南よりで確認した溝を調査した結果、土師器・須恵器のほかに石製模造品の勾玉や銅製品の耳環が出土した。この溝の調査の過程でさらに古い時期の溝を確認した。この古い時期の溝からは遺物の出土がなく、砂を基本とした土で埋まっていた。箱型の断面を持つことから人為的な溝であると判断した。これらの成果に基づいて2月25日に現地説明会を開催した。その後、1面目の調査の補足等を行い、3月2日から、開発で損傷を受ける部分について2面目の調査を行ったが、遺構の確認はできなかった。2面目の記録等を行い、3月7日に現地での調査を終了した。尚、2月21日から遺物洗浄を行い、3月1日に終了した。翌2日から注記を行い、3月14日に終了した。

遺物整理・報告書作成作業 5月31日から株式会社島田組の整理棟にて遺物の分類・接合・実測・トレース・写真撮影を行い、10月まで報告書作成作業を行った。

調査参加者

現地	石岡 幸・伊藤 均・大庭 俊・藤原 龍治・小林 俊海・佐藤 政治・杉山 道雄・鈴木 清・須部 公夫・竹内 誠一・辻 健治・野本 徹・藤原 豊廣・松本 兼生・山本 留美子・渡邊 時次
整理	石岡 幸・山本 留美子・岡中 喜美・清岡 廣子・下澤 あい・田中 理恵・濱口 由美子・前田 紀子

3 地理的環境・歴史的環境

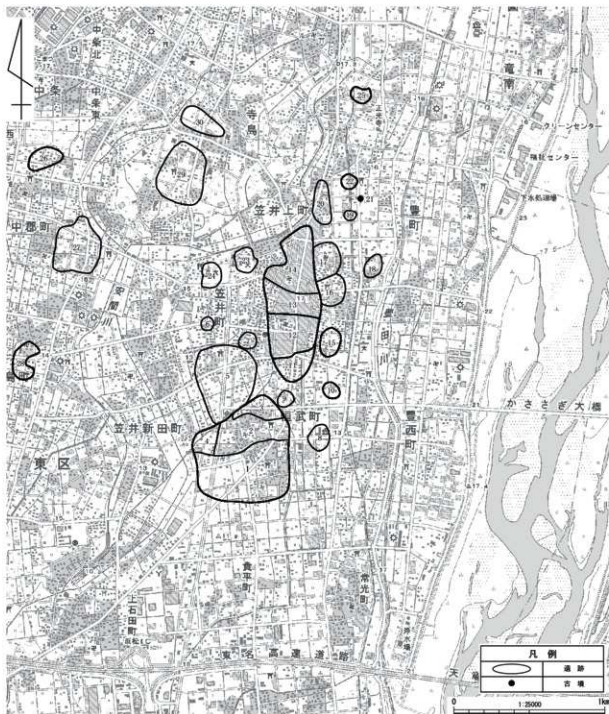
(1) 地理的環境

浜松市の東境を流れる天竜川は長野県の諏訪湖を水源とし、遠州灘へ流れる全長約216kmの長大な河川である。この流域の大部分は山岳地帯である。天竜区以南から河口までの約23kmの下流域で沖積平野（天竜川西岸に広がる沖積平野）を形成している。この沖積平野は東の磐原台地、西の三方原台地に挟まれ、この中を天竜川は南流する。現在では、近世以降の河川改修により流路が直線的に固定されているが、かつては「暴れ天竜」と呼ばれ、氾濫増水を繰り返し、流路の変更が絶え間なく行われた。その結果、複雑な微地形が展開している。

この沖積平野の中央に位置する東区恒武町に本遺跡は立地する。恒武町は北に接する笠井町とともに比較的安定した扇状地上にある。この基盤層は、過去の調査においても今回の調査においても確認しているが、旧天竜川の堆積物である礫層である。この基盤層の上に広がる扇状地の末端に本遺跡は立地し、この南側には比較的平坦な土地が広がっている。しかし、かつては天竜川の氾濫等により、流路の変更が頻繁に行われた結果、網の目のような流路が入り組んだ地形を形成していたと考えられる。これらの流路の間に安定した微高地が散在し、こうした場所に本遺跡などが存在する。

(1) 歴史的環境

縄文時代以前 恒武・笠井地区における縄文時代以前の遺跡は、現状では確認することが極めて困難である。旧石器時代に関しては後世の土砂堆積が著しく、当時の生活状況をうかがい知ることは困難である。また、縄文時代についてもいわゆる「縄文海進」ののちに海退するにつれ、沖積平



- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 恒武西宮遺跡 | 11 笠井東遺跡 | 21 蛭子森古墳 |
| 2 恒武西南遺跡 | 12 笠井下組遺跡 | 22 八幡西遺跡 |
| 3 恒武東覚遺跡 | 13 笠井中組遺跡 | 23 御殿山東遺跡 |
| 4 山ノ花遺跡 | 14 笠井上組遺跡 | 24 御殿山遺跡 |
| 5 笠井若林遺跡 | 15 ハッ面遺跡 | 25 上石原遺跡 |
| 6 笠井町広野遺跡 | 16 宮前遺跡 | 26 橋爪遺跡 |
| 7 笠井西南遺跡 | 17 大通西遺跡 | 27 万船遺跡 |
| 8 茶ノ木田遺跡 | 18 服織神社境内遺跡 | 28 上大瀬遺跡 |
| 9 社口遺跡 | 19 八幡南遺跡 | 29 宮東遺跡 |
| 10 平松遺跡 | 20 隋国遺跡 | 30 寺島天神遺跡 |

Fig.6 恒武西宮遺跡周辺の遺跡分布図

野が形成されたと考えられる。この時期はまだ沖積平野の形成途上であり、安定した平野ではなく、河道や湿地が交錯する景観であったと推定できる。そうしたことから、生活の基盤は三方原台地の土と考えられる。しかし、天竜川西岸に広がる沖積平野での発掘調査において縄文土器が出土する例があり、今後の類例増加によっては景観復元に変更が加えられる可能性もある。

弥生時代 弥生時代になると天竜川西岸に広がる沖積平野が安定化し、遺跡数が激増する。宮竹野際遺跡では縄文時代晩期から弥生時代前期併行の土器が出土し、本格的な水田造営開始前の平野利用の痕跡を見出すことができる。弥生時代中期になると宮竹野際遺跡をはじめ田見合遺跡、将監名遺跡、海東遺跡などから弥生土器が出土し、将監名遺跡では大規模な集落跡を確認している。恒武・笠井地区においては、これまで弥生時代の遺構・遺物の検出例が乏しかったが、近年社口遺跡において中期後葉の長頸壺が完形の状態で出土した。従来低調と思われていた当地区における弥生時代の集落様相に関して今後の再検討が求められる。弥生時代後期になると平野部の遺跡数が増加し、平野部への集落進出が本格化する。発掘調査された遺跡だけでも天王中野遺跡、中田北遺跡、将監名遺跡、山の神遺跡、越前遺跡、大蒲村東遺跡、森西遺跡、松東遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、海東遺跡などがあげられる。これらは恒武・笠井地区より南側の天竜川西岸に広がる沖積平野上に立地し、この時期には多くの集落が形成されている。

古墳時代 古墳時代になると沖積平野における弥生時代後期の濃密な遺跡分布から一変し、集落の様相が不明瞭になる。大規模な集落が解体し、小規模な集落へと景観が変化すると考えられる。この変化と呼応するように、恒武・笠井地区での人為活動の痕跡が明瞭になってくる。恒武西宮遺跡では、古墳時代前期（元屋敷Ⅱ式）の方形周溝墓や葬送儀礼に伴う土器集積を確認し、大量の古式土器器が出土した。

古墳時代中期になると、沖積平野を見下ろす丘陵や台地上に古墳が築かれる。後期にかけて三方原台地東縁一帯には総数 500 基を超える古墳が築造され、三方原古墳群と総称される。山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡で確認した大溝が中期の遺構として特筆される。これらの遺構からは多くの木製祭祀遺物や石製祭祀遺物・大量の土器が出土した。これらの調査結果から、山ノ花遺跡・恒武西浦遺跡では有力な首長層が存在し、祭祀を取り仕切ったと考えられ祭祀の様子の一端が知られることとなった。

古墳時代後期になると、恒武・笠井地区周辺では、豊町に立地する蛭子森古墳が特筆される。これは直径 23.6 m の円墳で右片袖式石室を有する。鳥裝飾付須恵器などの土器ほか大刀や鉄鍬・馬具などの遺物が出土した。多くの古墳が丘陵などに築造されたが、天竜平野に築造された数少ない古墳として注目でき、群集墳を築造した者とは隔絶した存在であったと考えられる。恒武西宮遺跡ではこの時期の集落も確認し、本遺跡を中心とした古墳時代後期の人為活動が活発であったことが判明している。

古代 本市を含む静岡県西部は律令体制においては遠江国に属する。恒武・笠井地区およびその周辺は龜玉・長田・磐田郡のいずれかに属していたと推定される。長田郡は和銅 2(709)年に長上・長下の二郡に分割され、磐田郡は後世に豊田郡が分離する。これらの郡のうちのいずれに古代の笠井地区が属していたかは明確にはわからない。近世の郡境と古代のそれを同一視することにはいささかの問題もあるが、概ね古代から続く郡境が踏襲されている判断すると、恒武・笠井地区を分断するように近世の郡境が存在する。笠井町は長上郡に、恒武・貴平・豊西町は豊田郡に属していることがわかる。近世の郡境が天竜川の流路跡であった可能性が高いことや郡境が錯綜していることから、古代においても天竜川の流路跡を郡境とし、それが錯綜していたと考えられる。この時期の

遺跡として笠井若林遺跡があり、堅穴建物跡・掘立柱建物跡を集中的に確認し、集落が営まれていたことが判明している。これらは奈良時代から平安時代に属している。また、恒武西宮遺跡でのこの時期の遺構や遺物は希薄であり、笠井若林遺跡を中心に人々が住んでいたと考えられる。

中世 中世において笠井地区周辺は、羽鳥荘と美蘭御厨の領域に含まれると考えられるが、これらの荘園についての情報は極めて少なく実態について明らかにできていない。この時期の遺構については比較的多く見つかっている。御殿山遺跡や笠井若林遺跡、恒武東覚遺跡などから山茶碗などが出土している。また、恒武西宮遺跡では鎌倉時代の菊花双鳥鏡が採集されている。中世後半になると笠井地区の全域で遺構や遺物が確認されている。特に、恒武西宮遺跡や笠井若林遺跡では方形に区画した屋敷地跡が見つかっている。これらの区画は現在の地境とほぼ一致することから、このころに形成された地割が現在まで継承されていることがわかる。

4 恒武西宮遺跡の調査歴

恒武西宮遺跡では、本報告書を作成した2018年までに23回の発掘調査が行われている。古墳時代～中世の遺跡が確認されているが、主に古墳時代と戦国時代に遺跡の時期が集中している。過去の調査の中で特筆すべきものを以下に挙げる。

1～2次調査は、1996年～1999年に、県道浜松環状線の建設工事に伴い行われた。古墳時代中期～後期を中心とした時期の堅穴建物跡、掘立柱建物跡、溝（自然流路跡）などが確認され、調査箇所一帯が古墳時代の集落域であることがわかった。また、土坑内から滑石製模造品がまとめて出土しており、一般的な集落とは異なる性質の遺跡である可能性が指摘された。戦国時代においては、掘立柱建物跡や区画溝が検出されており、屋敷地の広がる景観であったとみられている。

Tab.1 恒武西宮遺跡調査履歴一覧

回数	期間	調査主体	主な時代	文献	発行年
1次	1996.9～1997.3	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮・西浦遺跡』	2000
2次	1998.10～1999.6	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳・奈良	『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』	2002
3次	1998.9～1999.1	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
4次	1999.5	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
5次	1999.12	浜松市教育委員会	古墳	『浜松市遺跡調査集報』	2003
6次	2000.10～12	浜松市教育委員会	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
7次	2000.11～12	浜松市教育委員会	戦国	『恒武西宮遺跡』	2002
8次	2007.11～12	(財)浜松市文化振興財団	古墳・戦国	『恒武西宮遺跡8次』	2009
9次	2007.12	浜松市教育委員会	古墳～中世	『浜松市試掘調査概要』	2009
10次	2008.4	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成21年度浜松市試掘調査概要』	2011
11次	2010.9	浜松市教育委員会	古墳～鎌倉	『平成22年度浜松市試掘調査概要』	2012
12次	2014.9	浜松市教育委員会	古墳・奈良	『平成26年度浜松市文化財調査報告』	2016
13次	2015.6	浜松市教育委員会	古墳～中世	『平成27年度浜松市文化財調査報告』	2017
14次	2016.3	浜松市教育委員会	古墳	『平成27年度浜松市文化財調査報告』	2017
15次	2016.10	浜松市教育委員会	なし	『平成28年度浜松市文化財調査報告』	2018
16次	2016.10	浜松市教育委員会	古墳	『平成28年度浜松市文化財調査報告』	2018
17次	2017.3	浜松市教育委員会	古墳	『平成28年度浜松市文化財調査報告』	2018
18次	2017.4	浜松市教育委員会	古墳	『平成29年度浜松市文化財調査報告』	2019 予定
19次	2017.8	浜松市教育委員会	古墳	『平成29年度浜松市文化財調査報告』	2019 予定
20次	2017.8	浜松市教育委員会	古墳	『平成29年度浜松市文化財調査報告』	2019 予定
21次	2017.11～2018.2	浜松市教育委員会	古墳	本書	2018
22次	2018.5	浜松市教育委員会	中近世	整理作業中	-
23次	2018.6	浜松市教育委員会	古墳～中世	整理作業中	-

3次調査と6次調査は、県道浜松環状線に接続する市道拡幅工事に先立ち、実施された。調査箇所東側において、古墳時代前期の方形周溝墓と土器集積が検出されており、元屋敷式期の良好な資料として注目される。前期の遺構はこの2基が確認できたが、建物跡など集落に関するものは検出されなかった。古墳時代中期～後期においては、周辺の調査結果と同様に建物跡や溝などが検出された。検出された溝の中には、恒武大溝につながるとみられる自然流路があり、流路内からは完形に近い状態の須恵器や土師器が豊富に出土した。また、広範囲で戦国時代の屋敷地の区画溝が検出されており、戦国時代の区割りも現在まで踏襲されていることがわかった。

8次調査は、市道改良工事に伴い、3次調査箇所隣地で行われた。古墳時代前期の遺物が出土しており、3次調査区で検出された方形周溝墓などの遺構と関連するものとみられる。また、中世の遺構や遺物が確認されており、検出された遺構の中には戦国時代の区画溝がある。この遺構は3次調査で検出された区画溝とつながっており、屋敷地が方形の区画で区切られていたことがわかった。

18次調査は、2017年に工場建設に伴い実施された。調査箇所の西側で集落の中心にあたる高位面、東側で湿地状の堆積がみられる低位面を確認した。古墳時代前期と後期の遺構・遺物が確認されており、特に高位面で古墳時代前期の堅穴建物跡が検出されたことは、恒武地区の古墳時代前期の集落に関する重要な調査成果であるといえる。堅穴建物跡の北東からS字甕（C類）が出土していることから、集落は3世紀後半に形成されたものとみられている。

23次調査は、2018年に遺跡の東側で実施された予備調査である。敷地東側の調査坑で、古墳時代前期の遺物が集中的に出土した。出土遺物は古式土師器で、S字甕、高坏、長頸壺など複数の器種が確認できた。その他の調査坑でも、数は少ないが古式土師器が出土しており、敷地内全域に前期の遺物包含層があるとみられる。

以上の発掘調査以外にも、小規模開発に伴う予備調査が遺跡内の各地で行われている。初期の恒武西宮遺跡の発掘調査では、古墳時代中期～後期や戦国時代の調査成果が目立っていたが、近年の発掘調査で古墳時代前期の様相も明らかになってきている。これまでの調査結果をふまえた恒武西宮遺跡の傾向として、古墳時代前期の遺構・遺物は遺跡の東側、古墳時代中期～後期の遺構・遺物は遺跡の西側に多く確認できている。遺跡の北側では、奈良時代の遺構が数基確認されているが、全体的に古代の遺構・遺物は少ない。また、戦国時代においては、遺跡の全域で区画溝を中心とした遺構や遺物が検出されている。調査事例の増加によって、恒武西宮遺跡では、各時代の遺跡の中心地が異なった場所にあることが明らかになりつつある。

第2章 調査成果

1 予備調査の結果

2017年3月27日～29日に、開発予定地の予備調査（17次調査）を行った。開発予定地に調査坑を33箇所、調査溝3箇所を設定した。各調査坑における土層堆積状況は次のとおりである。I層：褐色～灰褐色シルト（表土）、II層：褐色系シルト層、III層：淡灰色系粘土層、IV層：黒灰色粘土層、V層：砂または砂礫（基盤層）。遺物包含層は、II a層の暗褐色シルト、II d層の黄褐色シルトである。

遺構は、調査坑6、18、21、25、26で小穴を検出した。遺構埋土は調査坑6においては黄褐色シルト、その他では暗褐色シルトである。また、敷地北西に自然流路（SD01）を確認した。流路は2000年の本発掘調査（6次調査）で検出されたものと同一と考えられる。今回検出した流路の幅は約4m、深さは最も深い場所で約1.1mである。

遺物は、調査区の全体から5世紀代の土師器が出土している。流路内の調査坑4、調査溝1、2、3からは、7世紀中葉の須恵器と土師器が多数出土しており、須恵器には坏身、坏蓋が多く含まれている。以上の調査結果から、開発予定地の全域で古墳時代の遺跡が残存していると捉えられる。（詳細は浜松市教育委員会2018『平成28年度 浜松市文化財調査報告』に掲載）

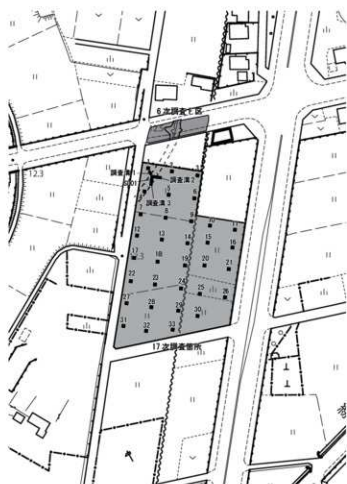


Fig. 7 17次調査位置図 (S=1/2,500)

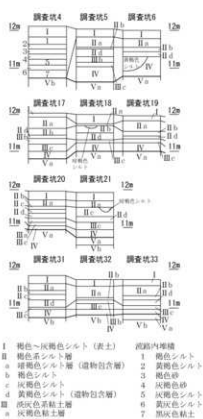


Fig. 8 土層柱状図 (S=1/100)

2 基本層序

本遺跡における基本層序は予備調査でも確認しているが、概ね5層に判別でき、今回確認した最下層でも礫層が存在した。これは旧天竜川系の堆積と考えられ、その氾濫原に本遺跡は立地している。以下にⅡ・Ⅲ・Ⅴ区の基本層序を示し、所見を記す。

I層 10YR6/1 褐灰色砂質シルト この層は表土層であり、概ね畑地に関わる耕作土である。

(6次調査 I層に対応 以下、()内は6次調査の成果に基づく。)

Ⅱ層 この層は2～4層に細分できる。

1 10YR6/1 褐灰色砂質シルト 一部に酸化鉄の沈着がみられる(Ⅱa層)

2 10YR5/1 褐灰色シルト(Ⅱa層)

3 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト(Ⅱa層)

4 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト(Ⅱa層)

5 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト この層の上面から1面目の遺構が掘られている。(Ⅱb層)

6a 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト この層の上面から2面目の遺構が掘られている。(Ⅱb層)

6b 2.5Y6/2 灰黄色シルト(Ⅱb層)

6c 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト(Ⅱb層)

6d 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(Ⅱb層)

Ⅲ層 この層は2層に細分できる。

1 10YR5/1 褐灰色シルト(Ⅲ層)

2 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(Ⅲ層)

Ⅳ層 この層は2層に細分できる。

1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト(Ⅳ層)

2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト(Ⅳ層)

Ⅴ層 旧天竜川の堆積物

1 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト(Ⅴ層)

2 礫層(Ⅴ層)

遺構はⅡ-5層の上面から掘り込まれていることが分かった。

また、一部の調査区では2面目の調査を行ったが、それは、Ⅱ-6a層から掘り込まれている。但し、3か所の2面目対象調査区で遺構を確認したのはⅡ区だけであった。

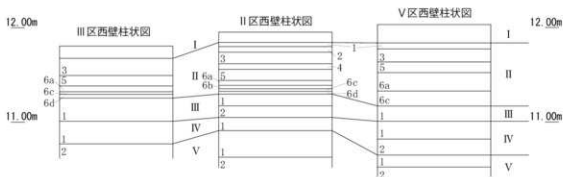


Fig. 9 基本層序柱状図 (S=1/40)

3. 検出遺構

(1) 概要

本調査地では下図のように遺構を確認した。基本層位のⅡ-5層(2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト層)の上面、標高11.4～11.6mのところでは遺構を確認した。6～7世紀の溝や掘立柱建物のほか、6世紀の土坑を確認した。この面が1面目の調査面である。また、1面目から10～15cm掘り下げたⅢ-2a層(2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト層)の上面、標高11.4～5mのところでは小穴1基、溝3条を確認した。この遺構からは極少量の遺物が出土しているが、1面目の遺物と明瞭な違いはなかった。次に、各調査区ごとに確認した遺構のうち主なものについて確認状況を記す。

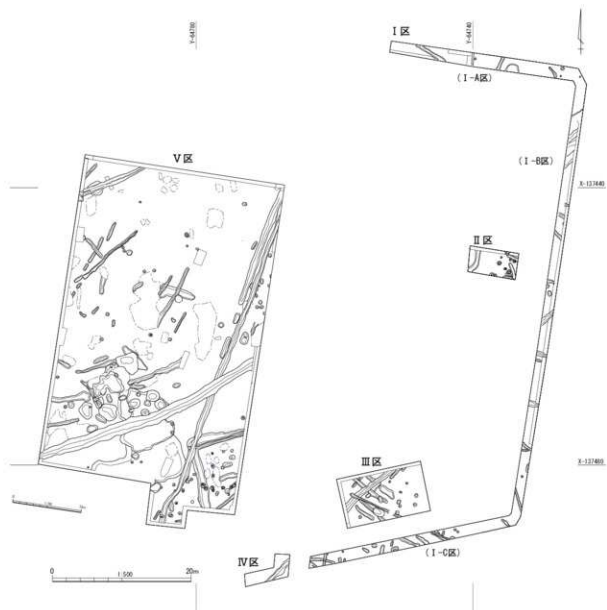


Fig.10 遺構配置図 (S=1/500)

(2) I区検出遺構

I区は開発範囲の東側にあり、水路設置に伴う調査区である。II-5層の上面で6～7世紀にかけての溝や小穴・土坑を確認した。以下に主要な遺構について述べる。

①溝

SD36・91・41・42・43 (Fig. 12) 調査区の北東部(I-B区)で確認したもので、北東から南西へ流れる溝群である。SD36・91、SD41・42、SD43の3時期に大別することができる。SD36は幅200 cm、深さ25 cm、SD91は幅110 cm、深さ25 cmの断面が船底型の溝である。それぞれはSD41・42・43の北にSD36、南にSD91があり、最も新しい時期に属する。SD36はN-50° 4′ -E、SD91はN-49° 59′ -E振れる。SD41は幅100 cm、深さ40 cm、SD42は幅96 cm、深さ35 cmの断面が船底型の溝で、SD41のほうが、SD42より新しいことがわかる。SD41はN-50° 82′ -E、SD42はN-46° 13′ -E振れる。SD41・42の下にSD43が存在し、ここから須恵器・土師器(Fig. 39-3～5)が出土した。このことから、SD43が6～7世紀の溝であると判断した。SD43は幅135 cm、深さ43 cmの断面が船底型の溝で、N-50° 1′ -E振れる。断面観察から一度掘りなおしていると考えられる。SD41・42から出土する土師器は古墳時代のものであるが、破片であることから、SD43よりもやや下る時期のものであると判断した。

SD30 (Fig. 13) 調査区の東部(I-B区の中央)で確認したもので、北東から南西へ流れる溝である。幅76 cm、深さ33 cmの断面がU字形の溝で、N-50° 51′ -E振れる。シルト質の土で埋まる。この埋土から須恵器(Fig. 39-7)・土師器(Fig. 39-6)が出土する。出土した遺物から古墳時代のもので判断できる。

②小穴

SP21 (Fig. 14) 調査区の南部(I-C区の西端)で確認したもので、幅24 cm、長さ24 cm、深さ13 cmの断面が船底型の浅い小穴である。褐灰色シルトで埋まる。遺物の出土はなかった。

SP26 (Fig. 14) 調査区の南部(I-C区の東側)で確認したもので、幅31 cm、長さ31 cm、深さ16 cmの断面が船底型の小穴である。埋土は2層に分かれるが、暗灰黄色シルトを主体に埋まる。遺物の出土はなかった。

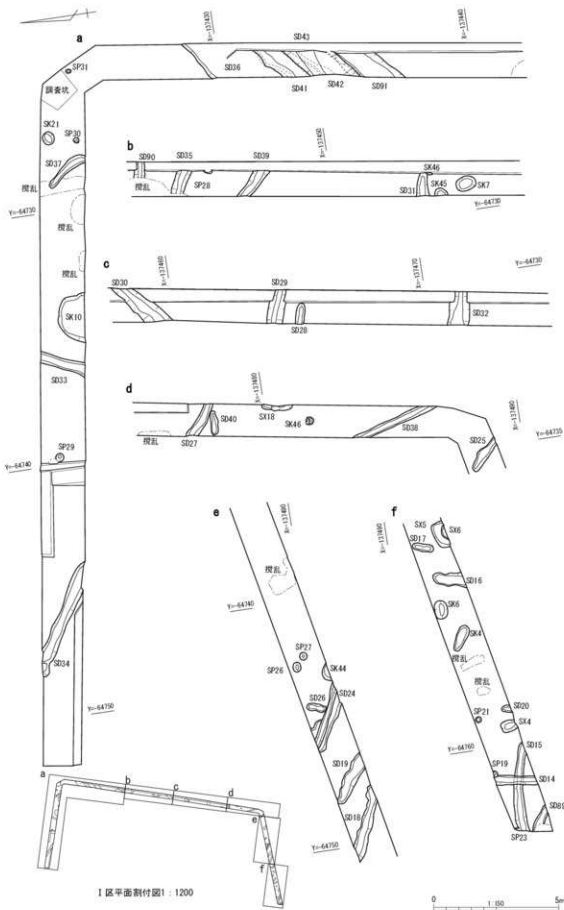
SP27 (Fig. 14) 調査区の南部(I-C区の東側)で確認したもので、幅31 cm、長さ31 cm、深さ16 cmの断面がV字型の小穴である。埋土は2層に分かれるが、SP26と同様のものが主体である。遺物の出土はなかった。

SP28 (Fig. 14) 調査区の東部(I-B区の中央やや北側)で確認したもので、幅18 cm以上、長さ31 cm、深さ16 cmの断面が箱型の小穴である。東半は設定したトレンチによって破壊されるが、東壁の断面にこの遺構に当たる層が存在しないため、トレンチ内で遺構が収束すると判断した。SP26・27と同様の埋土を主体とする。遺物の出土はなかった。

SP29 (Fig. 14) 調査区の北部(I-A区の中央)で確認したもので、幅32 cm、長さ33 cm、深さ15 cmの断面がU字型の小穴である。土師器片が出土する。

SP30 (Fig. 14) 調査区の北東部(I-A区の東側)で確認したもので、幅22 cm、長さ22 cm、深さ9 cmの断面がU字型の浅い小穴である。土師器片が出土する。

SP31 (Fig. 14) 調査区の北東部(I-A区とI-B区が交わるころ)で確認したもので、幅16 cm、長さ22 cm、深さ12 cmの断面がU字型の小穴である。断面の観察から柱痕もしくは柱抜き跡と判断できる部分が存在するが、平面では確認できていないため、柱穴であった可能性の指摘にとどめる。



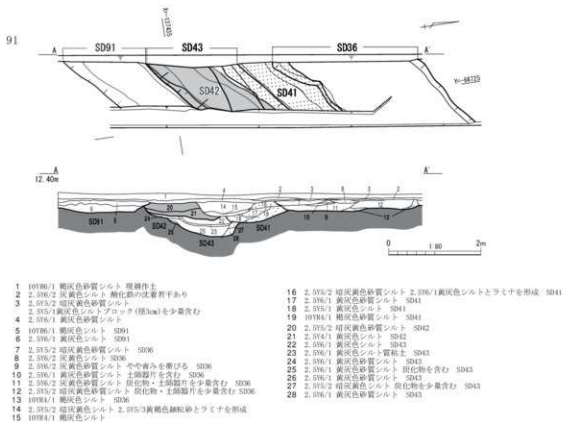


Fig. 12 SD36・91・42・41・43 平面・断面図 (S=1/80)

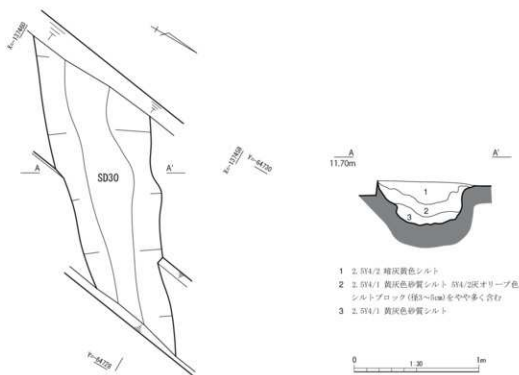


Fig. 13 SD30 平面・断面図 (S=1/30)

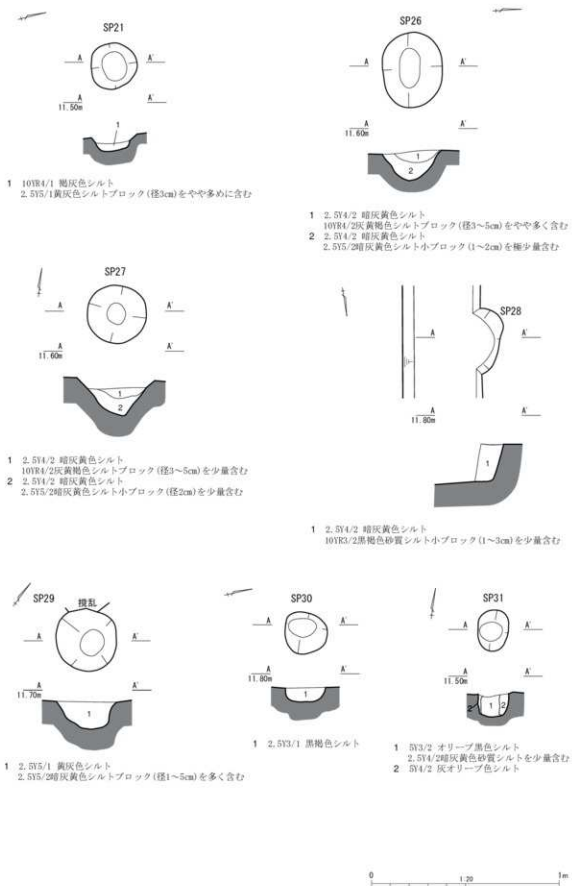


Fig. 14 小穴平面・断面図 (S=1/20)

これらの小穴の用途についてはSP31が柱穴である可能性があるが、その他の遺構については、SP26とSP27の形状と埋土が似ていることから同種遺構であると考えられる以外は、性格が不明である。ただし、大きさおよび深さが同じものが多いことから、似たような性格のものであると考えられる。

③土坑

SK04 (Fig. 15) 調査区の南部 (I-C区の西より) で確認したもので、幅40 cm、長さ108 cm、深さ6 cmの断面が船底型の浅い土坑である。鉄分の沈着がみられる暗灰黄色シルトで埋まる。遺物の出土はなかった。

SK06 (Fig. 15) 調査区の南部 (I-C区の西より) 南東で確認したもので、幅50 cm、長さ74 cm、深さ4 cmの断面が船底型の浅い土坑である。SK4と同様に暗灰黄色シルトで埋まる。鉄分の沈着はなかった。遺物の出土はなかった。

SK10 (Fig. 15) 幅198 cm、長さ108 cm以上、深さ24 cmの断面が船底型の浅い土坑である。遺物の出土はなかった。

SK21 (Fig. 15) 調査区の北部 (I-A区) SP30の北側で確認したもので、幅48 cm、長さ50 cm、深さ9 cmの断面が船底型の浅い土坑である。SK6と同様の暗灰黄色シルトで遺物の出土はなかった。

SK45 (Fig. 15) 調査区の東部 (I-B区の中央) で確認したもので、幅52 cm、長さ38 cm以上、深さ11 cmの断面が船底型の浅い土坑である。埋土は2層に分かれるがSK6と同様の暗灰黄色シルトを主体とする。遺物の出土はなかった。

(3) II区検出遺構

II区は開発範囲の東側にあり、防火水槽設置に伴う調査区である。II-5層の上面(1面目)で溝2条や小穴7基を確認した。その10 cm下のIII-6a層の上面(2面目)では小穴1基、溝3条を確認した。

1面目で確認した小穴はその配置から総柱建物(SH1)および柱穴列(SA1)と判断した。

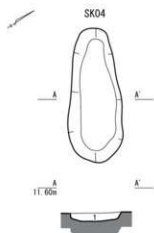
A 1面目確認遺構

①建物

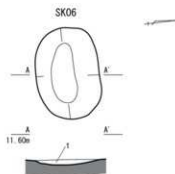
SH01 (Fig. 17・18) 調査区の東側のII-5層上面で確認した。遺構配置からSP1・SP2・SP11・SP5・SP13の柱穴からなる掘立柱建物で、総柱建物である可能性が高いと判断できる。各々の柱穴は幅42～72 cmのおおむね隅丸方形を呈し、柱抜き跡が存在する。SP2が北東へ、SP11が北西へ抜き取っているが、その他は南東へ抜き取っていると判断できる。これらの柱穴のうちSP1・SP5・SP11の柱抜き跡からは土師器甕片(Fig. 40-14～16)が出土し、SP1からややまとまって出土したが接合にはいたらなかった。これらの出土した遺物から古墳時代後期のものと判断できる。主軸はN-33° 8′ -E振れる。また、柱抜き跡の観察から径20～30 cmの柱が据えられていたと判断できる。なお、SP1・2・11の列とSP5とSP13の列の向きが違ふことから、建物でない可能性もあるが、確認できた遺構から一連の建物の可能性が高いと判断した。

②柱穴列

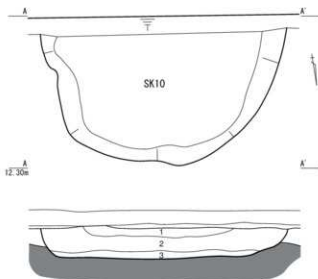
SA01 (Fig. 17) SP3とSP4からなり、主軸はN-28° 40′ -E振れる。この2つの柱穴はSH1のSP5・SP13の西側に沿うように存在することからSH1との関連を考えることも可能ではあるが、確認できている遺構が少ないことなどから独立した柱穴列として扱った。また、SP3は幅28 cm、長さ45 cmの楕円形、SP4は幅29 cm、長さ33 cmの隅丸台形の穴で、SP3には柱痕もしくは柱抜き跡



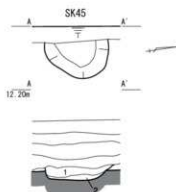
1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト やや酸化鉄の沈着あり



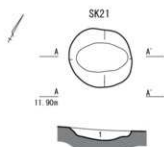
1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
10YR4/1暗灰色シルトブロック (様3~5cm)を少量含む



1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 酸化鉄の沈着あり
2 2.5Y3/2 黒褐色シルト
3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト



1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック (様3cm)を少量含む



1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトブロック (様3cm)を極少量含む



Fig. 15 土坑平面・断面図 (S=1/30)

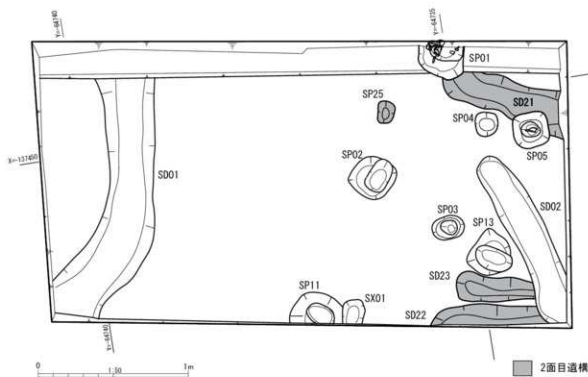


Fig. 16 II区確認遺構 (S=1/50)

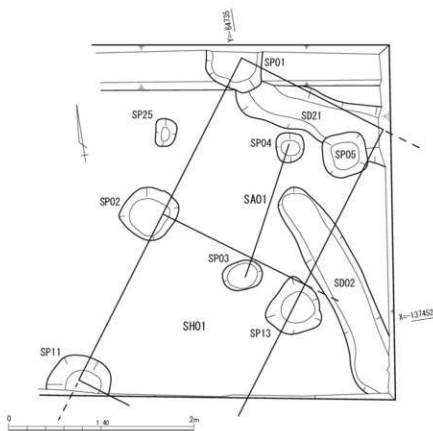


Fig. 17 SH01・SA01平面図 (S=1/40)

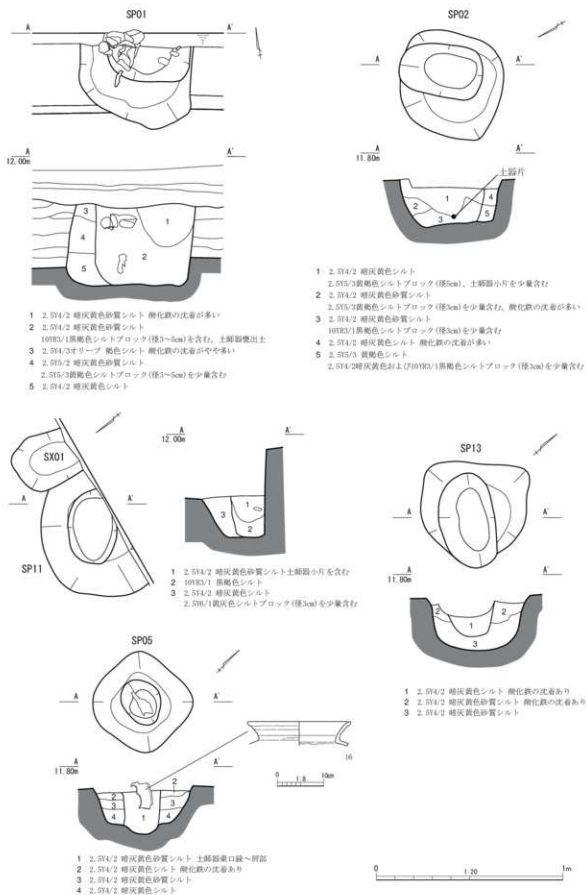


Fig. 18 SH01 各柱穴平面・断面図

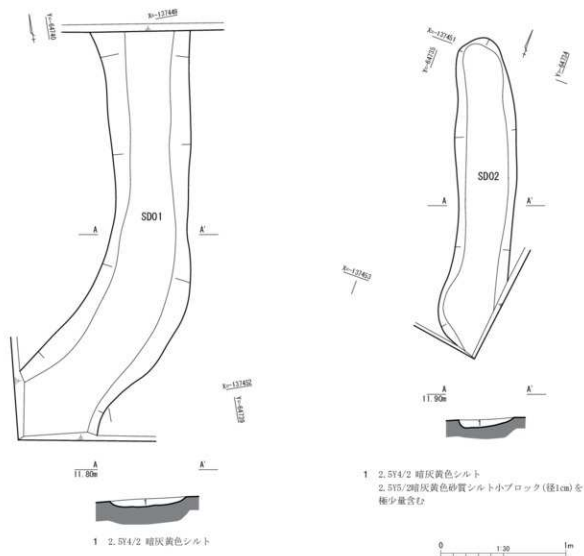


Fig.19 SD01・SD02 平面図 (S-1/30)

跡が確認でき、径 20 cm の柱が据えられていたと判断できる。なお、SH1 との関連性については不明であるが、よく似た方向性を持つことから足場の柱穴である可能性もある。

③溝

SD01 (Fig.19) 調査区の西側で確認したもので、幅 58 ～ 78 cm、深さ 10 cm の断面が船底型で、約 N-8° 17' -E 振れる素掘りの浅い溝である。また、調査区の南西部で西に曲がり、N-49° 35' -E の振れに変化する。長さは 3.5 m 以上である。比高差は 4 cm で緩やかに南から北へ傾斜する。土師器片が出土している。このことから古墳時代後期のものと判断できる。

SD02 (Fig.19) 調査区の南東角で確認したもので、幅 42 ～ 50 cm、深さ 3 ～ 5 cm の断面が船底型で N-16° 19' -W 振れる素掘りの浅い溝である。長さは 2.5 m 以上である。比高差は 7 cm で北から南へ傾斜する。土師器甕片・須恵器甕片 (Fig.40-17) などが出土している。このことから古墳時代後期のものと判断できる。

B 2 面目確認遺構

①小穴

SP25 (Fig. 16・20) 1 面目のSB1の北西部分で確認したもので、長さ30 cm、幅20 cmの隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。

②溝

SD21 (Fig. 16・20) SP1およびSP5に壊される溝で、幅45～60 cm、深さ10 cmほどの断面が船底型で、 $N-63^{\circ} 37'$ -W振れる東西方向の素掘りの浅い溝である。長さは1.6 m以上である。比高差は3 cmで北西から南東へ傾斜する。土師器甕片 (Fig. 40-18) が出土している。これは小片であるため、時期について判断しがたいが、古墳時代後期と判断できる。

SD22・23 (Fig. 16・20) 調査区の南東角で確認したもので、SD22は幅25 cm以上、深さ6～12 cmの、SD23は幅20～40 cm、深さ5～10 cmの断面船底型で、それぞれ、 $N-79^{\circ} 28'$ -W・ $N-78^{\circ} 13'$ -W振れる東西方向の素掘りの浅い溝である。長さはSD22が1.8 m以上、SD23が1.5 m以上である。比高差はSD22が5 cmで西から東へ傾斜するのに対して、SD23が4 cmで東から西へ傾斜する。遺物の出土はなかった。

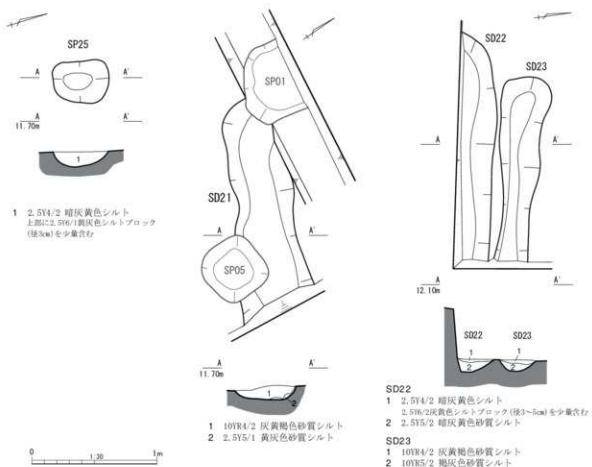


Fig. 20 SP25・SD21・22・23 平面・断面図 (S=1/30)

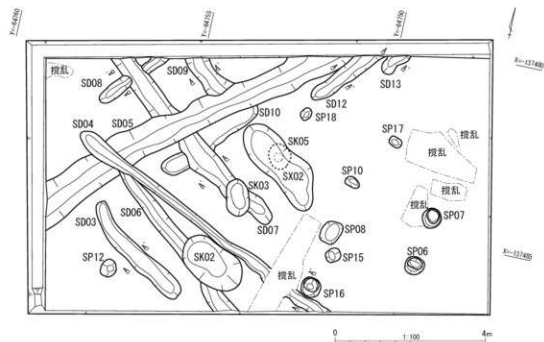


Fig. 21 III区確認遺構配置図 (1/100)

(4) III区検出遺構

III区は開発範囲の南東側にあり、防火水槽設置に伴う調査区である。III-1層上面で、土坑3基、小穴9基、溝10条、その他の遺構1基を確認した。ここでもII区と同様に2面目（III-2a層）の調査を行ったが遺構の確認には至らなかった。そのため、確認した遺構はすべて1面目のものである。

①建物

SH02 (Fig. 22・23) 調査区の東側で確認したもので、遺構配置からSP6・SP7・SP8・SP10・SP16の柱穴からなる掘立柱建物で、1間×2間もしくはそれ以上の掘立柱建物、または総柱建物であると考えられる。各々の柱穴はおおむね隅丸方形を呈し、SP6・SP7・SP16では柱抜き跡が存在する。SP6・SP16が東南東へ、SP7が南東へ抜取っていると判断できる。主軸はN-9°30′-E振れる。柱抜き跡の観察から径30cm前後の柱が据えられていたと判断できる。SP16では土師器甍片 (Fig. 40-19) が出土している。

②小穴

SP17 (Fig. 24) 調査区の南東側、SH2の北側で確認したもので、長さ35cm、幅24cmの隅丸方形の小穴である。断面の観察からは柱抜き跡と判断できる部分を確認したが、平面では確認できなかった。遺物の出土はなかった。

SP12 (Fig. 24) 調査区の南西側で確認したもので、長さ46cm、幅42cmの隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。

SP15 (Fig. 24) 調査区の南東側で確認したもので、SH2のSP8の南側に存在する。長さ40cm、幅34cmの隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。

SP18 (Fig. 24) 調査区の南西側で確認したもので、長さ32cm、幅26cmの隅丸方形の小穴である。柱痕等は確認できなかった。出土している土師器片から、古墳時代後期の遺構と判断した。

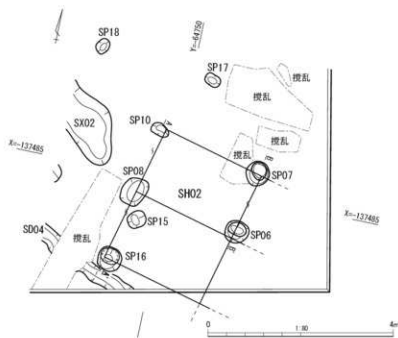


Fig. 22 SH02 平面図 (S=1/80)

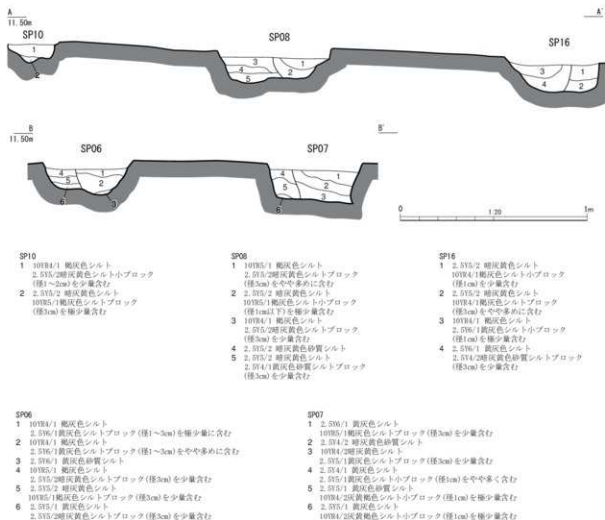


Fig. 23 SH02 断面図 (S=1/20)

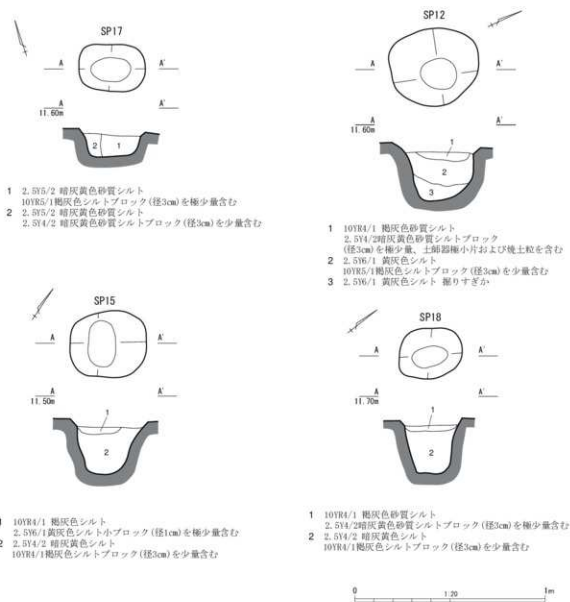


Fig. 24 SP17・12・15・18 平面・断面図 (S=1/20)

③土坑など

SK02 (Fig. 25) 調査区の南西側で確認したもので、長さ 180 cm、幅 105 cm の楕円形を呈し、深さ 25 cm の断面が船底形の土坑である。

SK03 (Fig. 25) 調査区の中央で確認したもので、SD10 よりも新しいものである。長さ 100 cm、幅 60 cm の楕円形を呈し、深さ 12 cm の断面が船底形の土坑である。

SK05 (Fig. 25) 調査区の中央で確認したもので、SX2 に先行する。長さ 69 cm、幅 58 cm の南側がややとがる楕円形を呈し、深さ 30 cm の断面が船底形の土坑である。

SX02 (Fig. 25) SD10 の東側に並行する。長さ 260 cm、幅 96 cm のやや長い楕円形を呈し、深さ 10 cm の断面が船底形の土坑である。

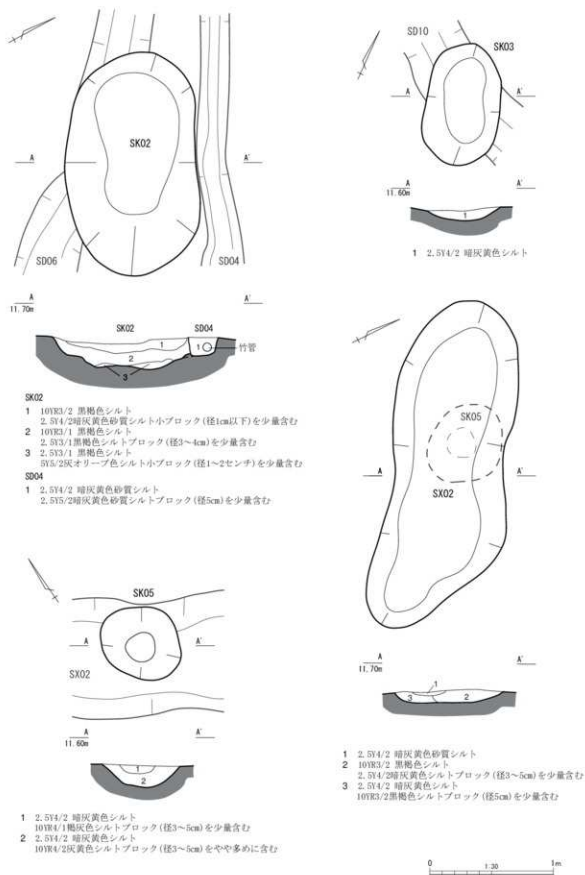


Fig. 25 SK02・03・05・SX02 平面・断面図 (S=1/30)

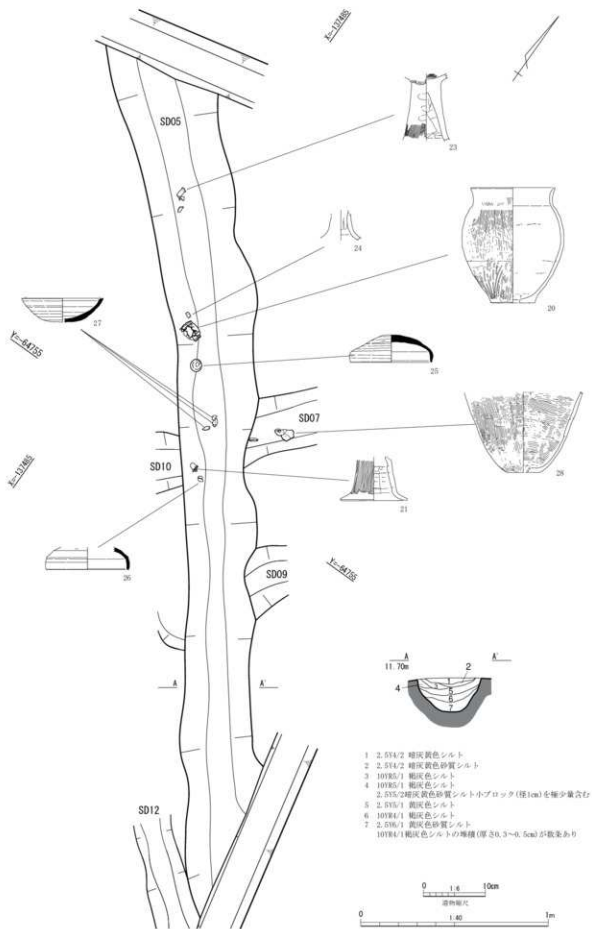


Fig. 26 SD05 平面・断面図 (S=1/40)



Fig. 27 SD03・08・09・10・12・13 断面図 (S=1/30)

④溝

SD05 (Fig. 26) 調査区の北西部分で確認したもので、幅 68 ~ 100 cm、深さ 30 ~ 40 cm の断面逆台形の N-53° 16' -E 振れる素掘りの溝であり、SD4 と SD6 が交差する付近で N-41° 19' -E に振れが変化する。底面の標高値から比高差が 7 cm で中央部分が下がっていることが分かる。北東端と南西端の比高差は 1 cm ないことから、本来はおおむね水平な底面であったと判断できる。須恵器 (Fig. 40-25 ~ 27) や土師器 (Fig. 40-20 ~ 24) が出土したことから 6 ~ 7 世紀のものと判断した。

SD07・10 (Fig. 26・27) SD5 と交差し、それぞれ幅 51 ~ 55・52 ~ 75 cm、深さ 15 ~ 20・10 ~ 33 cm の断面が船底形の N-51° 17' -W 振れる素掘りの溝である。SD5 と SD7・10 の新旧関係については当該部分の埋土の違いを確認できなかったため、同時に存在したと判断した。また、溝底面の標高値から SD7 は比高差が 3 cm で北西から南東へ緩やかに、SD10 は比高差が 23 cm で南東から北西へ傾斜し、SD5 へ合流したものと判断できる。SD7 では土師器片 (Fig. 40-28・29) が出土した。

SD08 (Fig. 27) SD7 と交差する幅 36 cm、深さ 16 cm の断面が船底型の N-42° 11' -E 振れる浅い素掘り溝である。溝底面の標高値から比高差が 4 ~ 3 cm で北東から南西へ緩やかに傾斜する。

SD09 (Fig. 27) SD7 の東側で確認した。SD7 に並行し、SD5 と交差する幅 48 ~ 65 cm、深さ 14 cm の N-48° 34' -W 振れる浅い素掘り溝である。SD5 との新旧関係は SD7・10 と SD5 との関係と同様に埋土の違いを確認できなかったため、SD5 と同時に存在したと判断した。また、その SD5 と同時に存在した SD7・10 とともに存在したと判断した。SD9 の溝底面の標高値から比高差が 2 cm で、北西よりも南東のほうが低くなっているが、確認長が 1.2m であるため溝全体の傾斜方向については判断しがたい。

SD12 (Fig. 27) 調査区の北東側で確認した。幅 41 ~ 47 cm、深さ 8 ~ 10 cm の断面が船底形の N-41° 4' -E 振れる浅い溝である。溝底面の標高値から比高差が 6 cm で、南西から北東へ傾斜する。

SD13 (Fig. 27) SD12 に並行し、その南東側で確認した。幅 36 ~ 43 cm、深さ 11 cm の断面が船底形の N-40° 56' -E 振れる浅い素掘り溝である。溝底面の標高値の比高差が 1 cm ないことと、確認長が 76 cm であることから溝全体の傾斜方向については判断しがたい。

SD04 (Fig. 21) 調査区の南西側中央寄りで確認した。幅 24 ~ 45 cm、深さ 15 cm の断面が箱形の N-65° 33' -W 振れる溝で竹管が埋設されており、暗渠排水路と判断できる。溝底面の標高値から比高差が 8 cm で、北西から南東へ傾斜する。

SD06 (Fig. 21) 調査区の南西側で確認した。幅 45 ~ 52 cm、深さ 10 cm の断面が船底形の N-51° 13' -W 振れる浅い素掘り溝で SD4 に先行する。溝底面の標高値から比高差が 4 cm で北西から南東へ傾斜する。

SD03 (Fig. 27) 調査区の南西側で確認した。幅 50 ~ 53 cm、深さ 7 ~ 9 cm の断面が船底形の N-58° 9' -W 振れる浅い素掘り溝である。溝底面の標高値から比高差が 4 cm で北西から南東へ傾斜する。

(5) IV区検出遺構

IV区は開発範囲の南側にあり、排水路の付け替えに伴う調査区である。ここでは溝1条を確認した。

①溝

SD11 (Fig. 29) 調査区の南東角で確認した幅 55 ~ 100 cm、深さ 30 ~ 35 cm の断面が逆台形の N-45° 16' -E 振れる素掘りの溝である。土師器片や円礫などが出土した。明瞭な砂層などの水流堆積は確認できていないが、中層より下位では堆積土が砂っぽくなるので、非常に緩やかな水流が存在したと考えられる。また、底面の標高値分布から北東から南西へ流れる溝と判断できる。出土した須恵器 (Fig. 40-32) から古墳時代後期の遺構と判断できる。

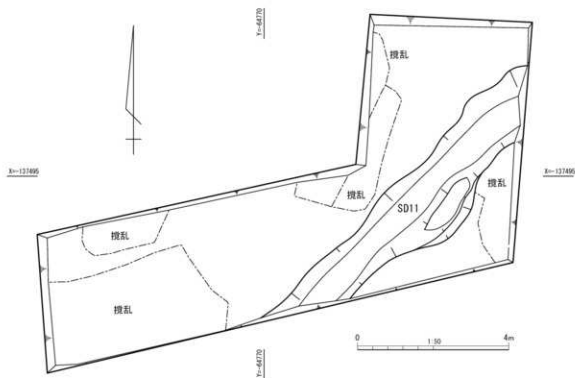


Fig. 28 IV区確認遺構配置図 (S=1/50)

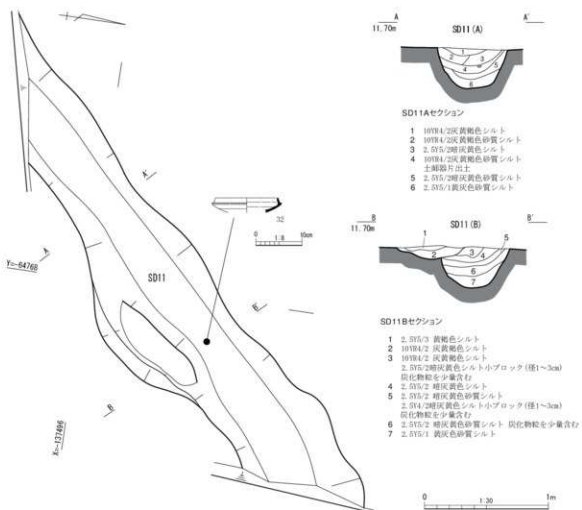


Fig.29 SD11 平面・断面図 (S=1/30)

(6) V区検出遺構

V区は開発範囲の南西部分にあり、掘立柱建物と思われる小穴群や、小穴、土坑、溝などの多くの遺構を確認している。概して、南側に遺構が集中している。この調査区でも上下2面の調査を行ったが、遺構はすべて1面目で確認した。なお、2面目に関しては、建物の基礎部分によって影響を受ける部分のみの調査を行った。

①建物および小穴群

小穴群 (Fig.32・33) 調査区の南東側には、柱穴と判断できる複数の遺構が確認できている。遺構の上下関係は少なくとも2時期あるようである。しかし、遺構の配置状況からさらに多くの時期差が存在しているものと判断した。また、遺構平面および断面の観察から、その多くが柱穴の可能性が高いことも確認している。特にSP35・38・46・47・66はやや大きめの掘方を持ち、深さも深いことや、その配置状況から、掘立柱建物が建っていたと考えられるが、SP47・46やSP36・44には新旧関係が存在することから、この小穴群には複数の時期が存在することがわかる。その配置から、SP35・36・37・38が一組の遺構(掘立柱建物か)を構成すると想定されるが、他の小穴と

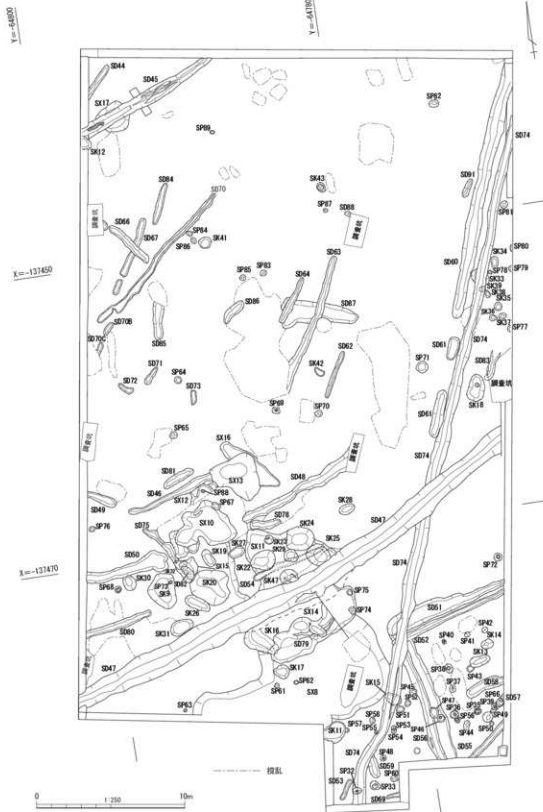


Fig. 30 V区遺構配置図 (S=1/250)

の関連性が不明瞭である。このようにこの地点には複数の小穴が存在するが、各遺構間の関連性が判然としないため、掘立柱建物などを確定することはできなかった。

②小穴

SP83 (Fig. 31) 調査区中央北寄りで確認したもので、幅 39 cm、長さ 47 cm の楕円形を呈し、深さ 21 cm の断面が逆台形の小穴である。底部を欠くほぼ 1 個体分の土師器甕の破片 (Fig. 42-64) が出土した。破損もしくは破壊後に埋納されたものと判断できる。また、別個体の土師器壺の頸部から肩部片 (Fig. 42-63) が出土した。これらは古墳時代後期のものである。

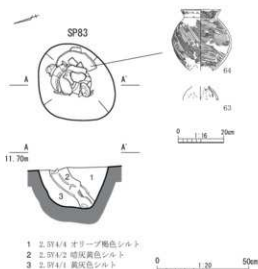


Fig. 31 SP83 平面・断面図 (S=1/20)

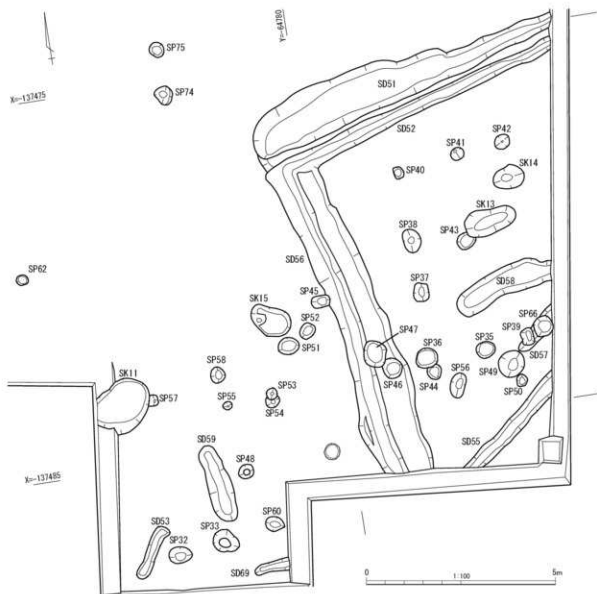


Fig. 32 V区南東部小穴群 (S=1/100)

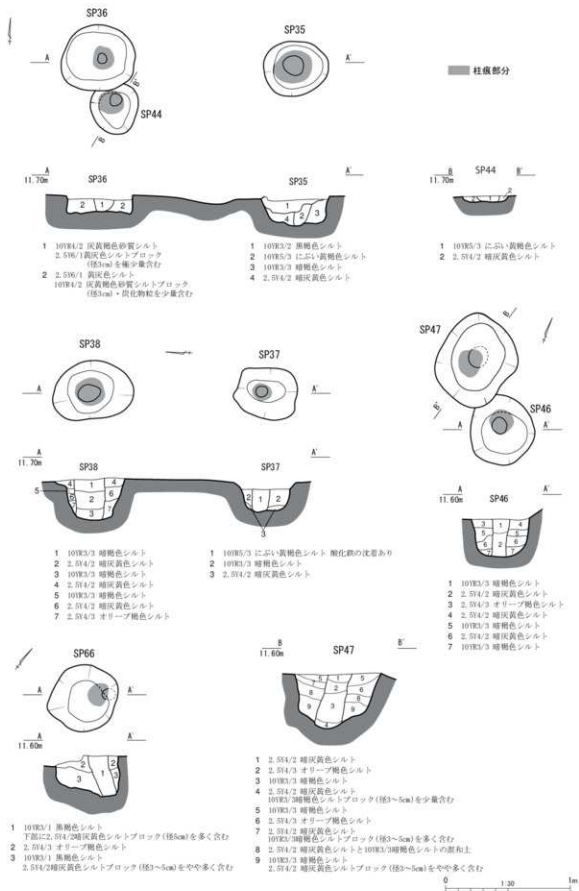


Fig. 33. 小穴群各遺構平面・断面図 (S=1/30)

③土坑

SK11 (Fig. 34) 調査区の南側で確認したもので、幅 120 cm、長さ 160 cm 以上の楕円形を呈し、深さ 26 cm の断面が逆台形の土坑である。遺構の北東部で炭化物の広がりを確認した。これは中位層上面に相当する部分である。N-85° 49′ -E 振れる。

SK18 (Fig. 34) 調査区の北東で確認したもので、幅 112 cm、長さ 178 cm のやや北側がとがった楕円形を呈し、深さ 18 cm の断面が船底型の浅い土坑である。この土坑から、土師器の小片 (Fig. 42-55) が出土したほか、有稜高坏 (Fig. 42-54) がほぼ完形で出土した。これはほぼ遺構に対して直交方向に倒れた状態で出土した。N-23° 7′ -E 振れる。出土遺物から古墳時代中期～後期の遺構と判断できる。

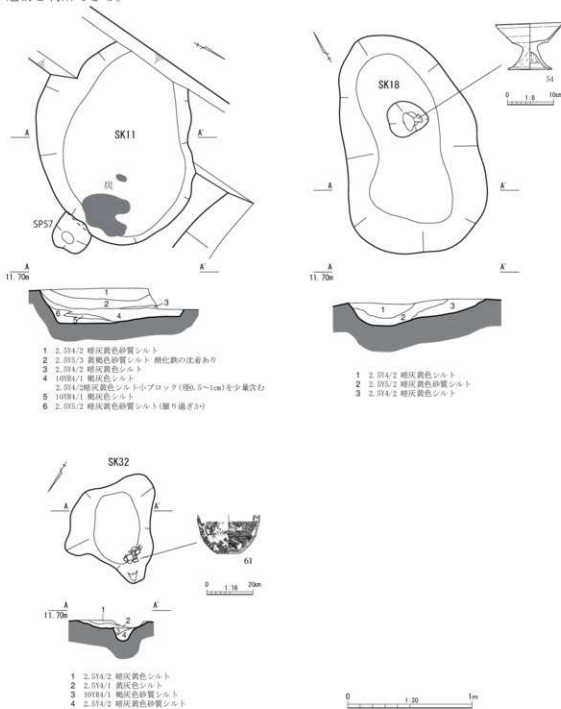


Fig. 34 SK11・18・32 平面・断面図 (S=1/30)

SK32 (Fig. 34) 調査区の中央やや西側、SD47の北側の土坑群中で確認したもので、幅30 cm、長さ40 cmの不整形な平面を呈し、深さ23 cmの断面が船底型の土坑である。平底の甍底部片 (Fig. 42-61) がまとまって出土した。この遺構はSD75に壊されていることから、その際に上部については欠損した可能性も考えられるが、すべて破片で出土していることから、破損もしくは破壊したのちに主に底部のみを埋納したと考えられる。なお、この遺物の底部には葉脈圧痕が残っている。

④溝

SD45 (Fig. 35) 調査区の北西で確認した、素掘りの溝である。中央部分や南西端の一部が深くなっている。テラス状の部分が存在する。幅64～93 cm、深さ18 cmである。比高差が2 cmであるが北東から南西に緩やかに傾斜している。N-67° 18′ -E振れる。土師器小片 (Fig. 46-129～131) が出土した。

SD47 (Fig. 36) 調査区中央やや南側で確認したもので、幅115～145 cm、深さ45～55 cmの断面が逆台形の素掘りの溝である。底面の比高差が8 cmで北東から南西に緩やかに傾斜している。この溝の堆積は上層・中層・下層の3層に判別できた。主に中層にシルトと細粒砂および中粒砂の互層が存在し、それなりの水量があった時期があったことが分かった。上層と下層から遺物が出土し

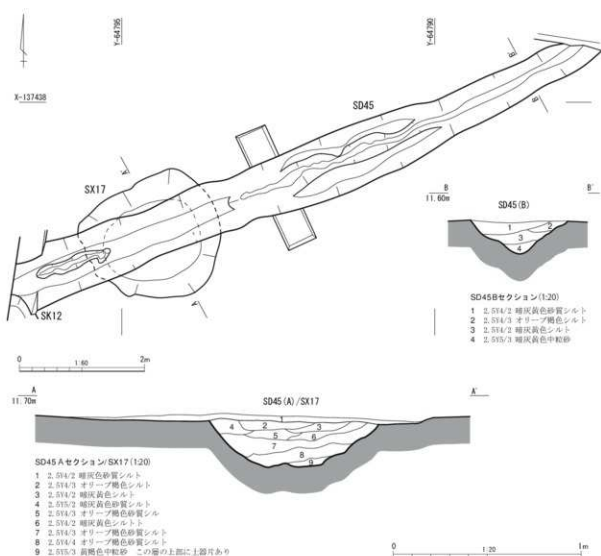


Fig. 35 SD45 平面 (S=1/60)・断面図 (S=1/20)

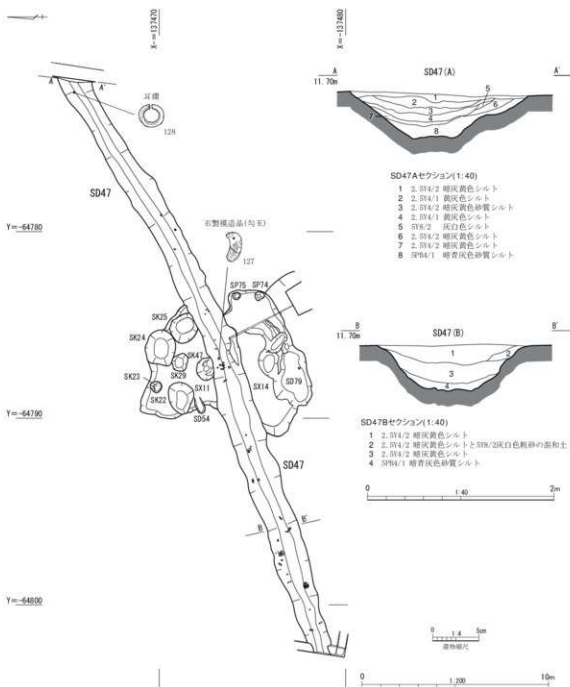


Fig. 36 SD47 平面図 (S=1/100)・断面図 (S=1/40)

た。下層では須恵器の坏・甕 (Fig. 45-102 ~ 126) や土師器片のほかに耳環 (Fig. 45-128) が、上層では土師器の甕 (Fig. 43-65 ~ 82) や甔 (Fig. 44-84 ~ 93) などと石製模造品の勾玉 (Fig. 45-127) が出土した。下層に須恵器が多く、上層に土師器が多い傾向がうかがえる。東側では $N-60^{\circ} 51'$ -E、中央から西では $N-71^{\circ} 31'$ -E 振れ、やや湾曲するように溝が作られている。出土した遺物から古墳時代後期 (7 世紀) 以降に埋没したことがわかる。

SD51・SD52・SD56 (Fig. 32・37) 調査区の南東で確認した L 字状を呈する溝である。SD51 は幅 45 ~ 137 cm の深さ 13 cm、SD52 は幅 34 ~ 51 cm の深さ 11 cm の断面が船底型の素掘りの溝である。SD56 は幅 119 ~ 154 cm の深さが西側で 17 cm、東側で 7 cm の断面が船底型の素掘りの溝である。比

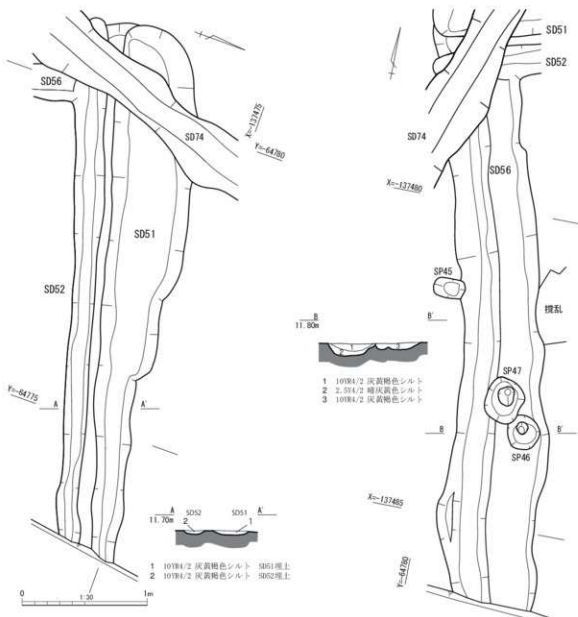


Fig. 37 SD51・52・56 平面・断面図 (S=1/30)

高差については高くなったり低くなったりの繰り返しで、どちらかというとも西側および南側が高い。この遺構からは土師器の破片 (Fig. 46-132～134) が出土した。いずれも小破片であることや、SP46・47などの柱穴と判断できる遺構を壊して形成されていることから、古代以降の遺構と考えられる。また、この溝はSD51・52が並列するように存在することやSD56の東側と西側で深さが異なることから、新旧関係は不明瞭ではあるが、少なくとも2時期の溝が存在する想定される。

SD74 (Fig. 38) 調査区の東側で確認した幅50～100 cm、深さ45～53 cmの断面が箱型から逆台形のN-20° 82′ -E振れる素掘りの溝である。調査区の南端付近でのN-39° 14′ -Eの振れに変化し2.6 m南へ進んだところで、さらにN-9° 34′ -Eの振れに変化して調査区外へ伸びる。溝底面の比高差は4 cmで北から南へ傾斜する。堆積の上位はシルトを主体とし、下層はシルトと細粒砂もしくは中粒砂の互層である。遺物の出土はなかった。また、この溝は北から南へ直線的に掘られているが、調査区の南端付近でズレが生じている。このことは北側から南側へ掘削したのではなく、北側と南側で分割して掘削した可能性を示していると考えられる。

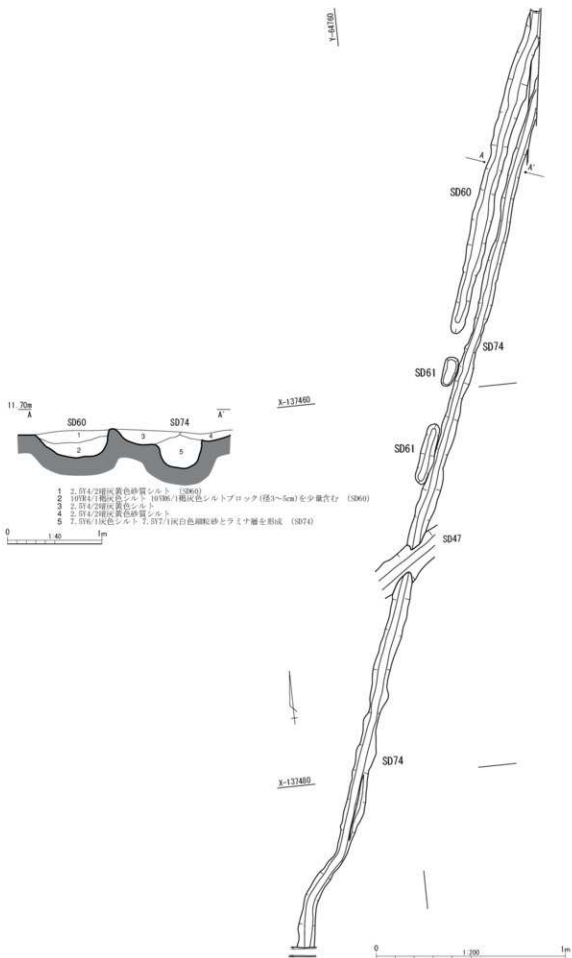


Fig. 38 SD74 平面図 (S=1/200)・断面図 (S=1/40)

4. 出土遺物

(1) I区出土遺物

I区では、6世紀代を中心とする土師器の小型丸底壺や高坏・須恵器の坏身・坏蓋などが出土している。

SK7 (Fig. 39) 1は土師器の小型丸底壺である。

SD36 (Fig. 39) 2は須恵器の坏蓋でツマミのないものである。7世紀のものである。

SD43 (Fig. 39) 3～5は土師器の高坏である。3は有稜高坏の坏部、4は坏底～脚部片、5は屈折脚高坏の脚～裾部である。

SD30 (Fig. 39) 6は土師器の壺で、体部片である。7は須恵器の坏蓋で、ツマミのないものである。6世紀後半のものである。

SD31 (Fig. 39) 8は土師器の高坏で、脚～裾部片である。その形状から屈折脚高坏である。

遺構外 (Fig. 39) 9は土師器の屈折脚高坏で、脚～裾部片である。10は須恵器の甕で肩部片である。円孔の一部が残存する。11は坏蓋で6世紀前半のものである。12は坏身で6世紀のものである。13は内耳鍋の耳部の破片である。

(2) II区出土遺物

II区の1面目では、掘立柱建物を構成する柱穴を中心に、6世紀代の土師器甕・高坏や須恵器の甕などが出土している。2面目遺構では、時期を確認できる遺物は出土しなかった。

SP1 (Fig. 40) 14は土師器の低脚高坏で、坏底～脚部片である。脚裾はやや広がる。

SP11 (Fig. 40) 15は土師器の高坏で坏部片である。坏部内面に横方向のハケがある。外面は縦方向にナデがある。

SP5 (Fig. 40) 16は土師器の甕で口縁～頸部片である。

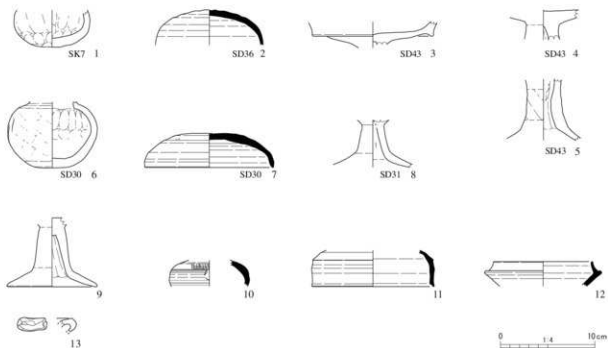


Fig. 39 I区出土遺物

SD2 (Fig. 40) 17 は須恵器の甕で底部を欠く頸～体部片である。肩部と腰部に2条の沈線があり、その間に5条の波状文が楕描きされる。

SD21 (Fig. 40) 18 は口縁部片で甕のものと考えられる。

(3) III区出土遺物

III区では、掘立柱建物や溝から6～7世紀の土師器の甕・高坏、須恵器の坏身・坏蓋・高坏などが出土する。

SP16 (Fig. 40) 19 は土師器の甕で頸部片である。外面の頸部に縦方向のハケの痕跡がある。内面に横方向のハケがある。頸部より下は右上がり、頸部より上は右下がりである。

SD5 (Fig. 40) 20 は土師器の甕で外面に縦方向のハケ、内面は摩擦のため不明瞭であるが底部にユビオサエの痕跡がある。21 は台付甕の脚台部片で裾が屈曲する。外面に縦方向のヘラミガキが裾部の屈曲するところまでである。22～24 は土師器の高坏である。22 は脚～裾部片で、その形状から屈折高坏である。23 は坏底～脚部片で脚部外面に縦方向のハケ、内面は板状工具で斜方向に

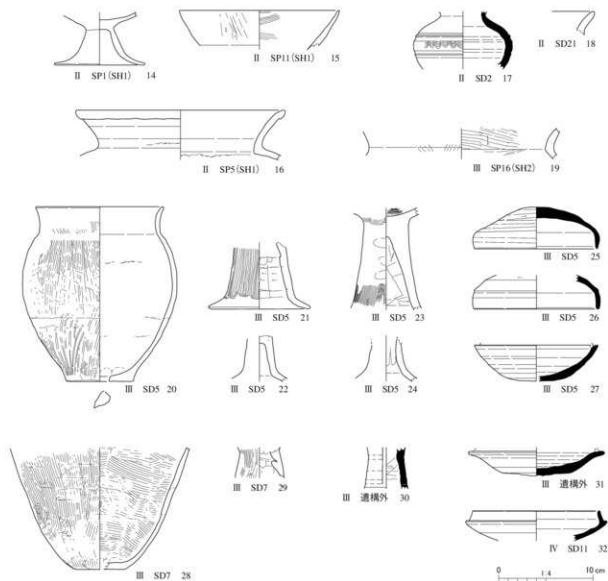


Fig. 40 II・III・IV区出土遺物

ナデる。坏底部にハケがある。24は脚部片で裾部が広がる低脚高坏である。25・26は須恵器の坏蓋で、6世紀のものである。27は坏身で7世紀のものである。

SD7 (Fig. 40) 28は土師器の甕で底～体部片である。平底の甕で外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。29は土師器の台付甕で脚部片である。外面に縦方向のハケがある。

遺構外 (Fig. 40) 30は須恵器の高坏で脚部片である。長方形のスカシが2方向に存在する。31は須恵器の坏身で7世紀のものである。

(4) IV区出土遺物

IV区からは溝から須恵器の坏身や少量の土師器片が出土した。小破片が多く、図化できるのは須恵器の坏身1点のみである。

SD11 (Fig. 40) 32は須恵器の坏身で6世紀のものである。

(5) V区出土遺物

V区では、6～7世紀代の土師器甕・甔・高坏、須恵器坏身・坏蓋・高坏、石製模造品の勾玉・双孔円板、金銅製品の耳環などが出土している。主に出土しているのはSD47である。また、遺構に伴うものではないが、古代の遺物も出土している。

SP36 (Fig. 41) 33は土師器の甕で口縁部片である。

SX8 (Fig. 41) 34・35は土師器の甔の把手部である。36・37は須恵器の坏蓋である。37は口縁部にカエリのあるものである。38は坏身である。36～38は7世紀のものである。

SX10 (Fig. 41) 39は須恵器の坏蓋で6世紀のものである。40は坏身で7世紀のものである。

SX11 (Fig. 41) 41・42は土師器の甕の口縁部片である。42は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。47～50は土師器の高坏である。47は坏底～裾端部片で、裾端部がやや反りあがる。48～50は脚部片で、外面に縦方向のナデがある。43・44は須恵器の坏蓋である。43は6世紀、44は7世紀のものである。45は須恵器の坏身で6世紀のものである。46は須恵器の高坏で坏部片である。51は須恵器の高坏で坏底～脚部片である。

SX14 (Fig. 41) 52は須恵器の坏蓋である。外面頂部に「一」のヘラ記号がある。7世紀のものである。

SK15 (Fig. 42) 53は土師器の高坏であり、脚裾端部片である。

SK18 (Fig. 42) 54・55は土師器の高坏である。54は有稜高坏である。55は脚～裾端部片で裾部がやや広がる。54とほぼ同じ大きさであるため、これも有稜高坏であると考えられる。

SK20 (Fig. 42) 56は土師器の甕で口縁～体部片である。口縁端部を欠く。外面体部は縦方向のハケ、頸部付近は横方向のハケののちナデ消している。内面は横方向のハケがある。57は須恵器の坏身である。外面底部に「入」状のヘラ記号がある。7世紀のものである。

SK22 (Fig. 42) 58は須恵器の高坏で脚部片である。脚部を2分する部分に2条の沈線があり、その上下に長方形のスカシが2段ある。このスカシは2方向に存在する。

SK24 (Fig. 42) 59は土師器の甕で底部片である。

SK31 (Fig. 42) 60は須恵器の坏身で6世紀のものである。

SK32 (Fig. 42) 61は土師器の甕で平底の底部～体部片である。底部外面に葉脈圧痕がある。外面に斜方向から縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。

SP58 (Fig. 42) 62は土師器の甕で口縁～頸部片である。外面頸部付近に縦方向のハケ、内面の

同位置に横方向のハケがある。

SP83 (Fig. 42) 63は土師器の壺で頸～肩部片である。外面には摩滅により判断しがたいが斜方向のハケと思われるもの、内面には斜方向のハケののち縦方向のナデがある。64は土師器の甕で底部を欠く。外面に斜方向のハケ、内面には横方向から斜方向のハケがある。

SD47 (Fig. 43～45) 65～76は土師器の甕である。65は口縁～体部片である。外面に縦～斜方向のハケ、内面に横～斜方向のハケがある。66は口縁～体部片である。外面体部に横方向のハケ、頸部に縦方向のハケ、内面口縁～頸部に横方向のハケ、体部に横もしくは斜方向のナデがある。67は口縁～体部片である。外面の頸～体部に縦方向のハケ、内面の体部に斜方向のハケ、頸部に横方向のハケがある。外面にはススが附着するため、煮沸具として使用していたとみられる。68は口縁～頸部片である。外面の頸部に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。69は口縁～体部片である。ユビオサエ成形後、外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケがある。70はやや小型のものでひずんでいる。外面に縦方向のハケ、内面に斜方向もしくは横方向のハケがある。71は口縁～頸部片である。72は口縁～頸部片である。頸部内面に縦方向のハケがある。73は口縁～体部片である。74は口縁～頸部片である。頸部内面に横方向のハケがある。75は口縁～頸部片である。外面に横方向のナデ、内面口縁部に横方向の細かいハケの後、頸部から口縁端部にかけて粗

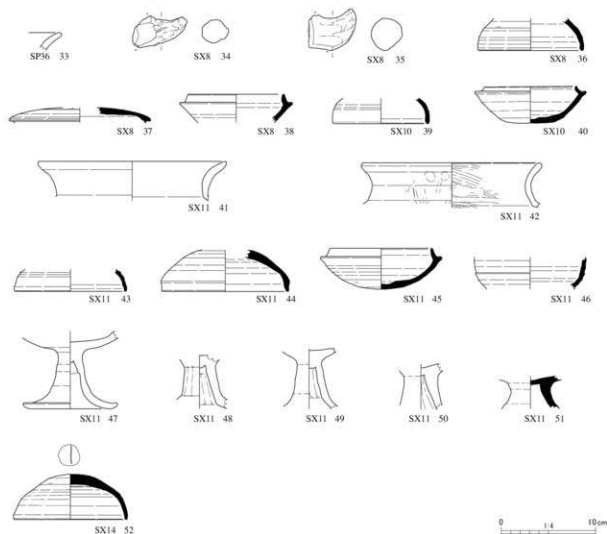


Fig. 41 V区小穴群・SX出土遺物

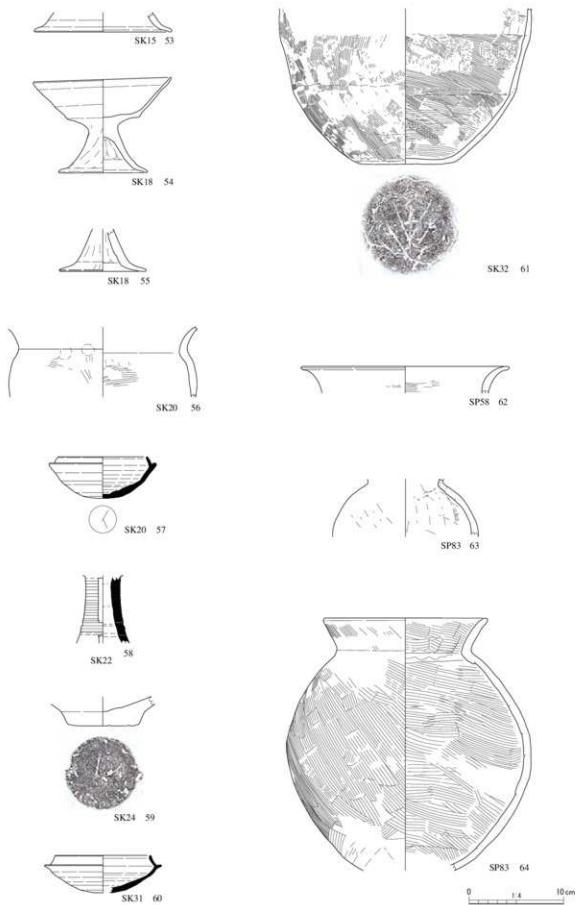


Fig. 42 V区小穴・土坑出土遗物

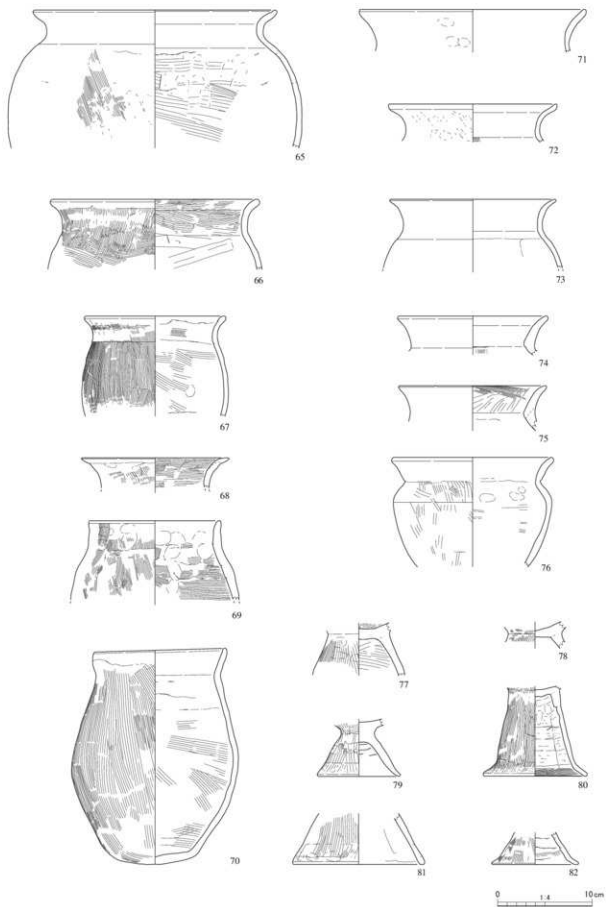


Fig. 43 V区SD47出土遗物(1)

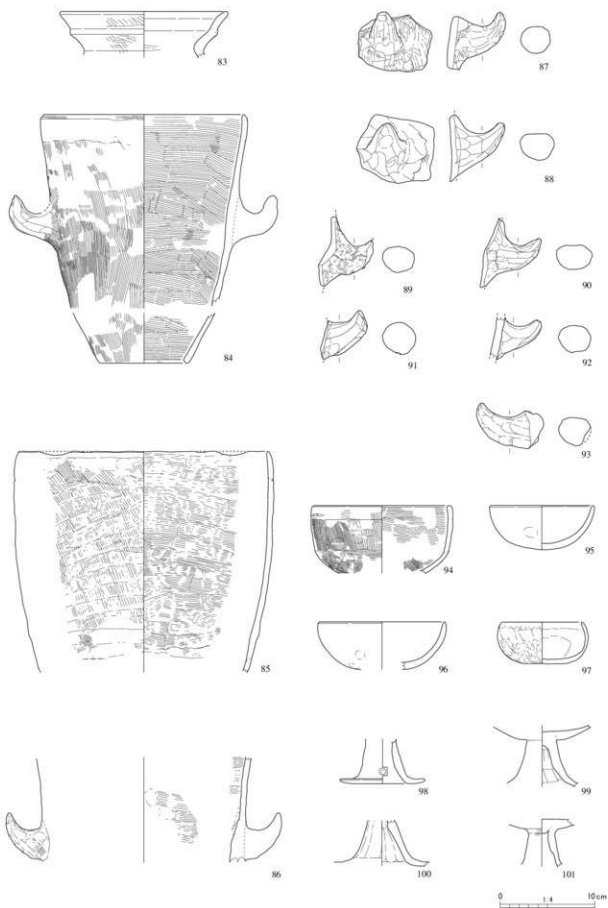


Fig. 44 V区.SD17出土遗物(2)

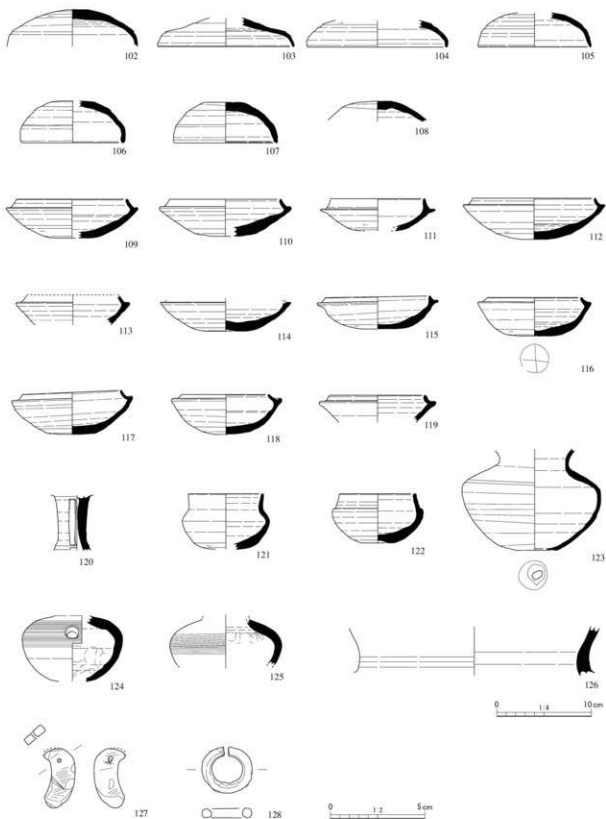


Fig. 45 V区SD47 出土遗物 (3)

いハケがある。76は口縁～体部片である。外面に縦方向の粗いハケ、内面に横方向のハケがある。

77～82は台付甕である。77～80は底～脚台部片、81・82は脚台端部片である。77は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。78は外面に縦方向のハケがある。ススが付着するため、煮沸具として使用していたとみられる。79・80は外面に縦方向のハケがある。81は外面に縦方向のハケ、内面に縦方向の板ナデがあり、端部は内側に折り返して成形する。82は外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがあり、端部は外側に広がる。

83は二重口縁壺で口縁部片である。外面に斜方向のミガキが所々に残存する。

84は底のない甕である。外面には縦方向のハケ、内面には横～斜方向のハケがある。口縁～体部までの部分と底の部分の間に接点は存在しないが、出土位置や材質・作成方法から同一のものとして図上にて復元してある。別作り把手を甕体部に張り付けたのち接合部分にハケをする。85は土師器の甕である。口縁～体部片で、外面に縦～斜方向のハケ、内面に横方向のハケがある。86は把手～体部片である。外面は摩滅が著しく把手の接合部分にハケが残っていることから84と同様の作り方であると考えられる。内面に横方向のハケがある。87～93は把手である。87・88・89は体部に別作りの把手を貼り付けている。87・89は、貼り付け後に84と同様にハケをする。89は先端部が欠損する。

94～97は鉢である。94は口縁～底部片で、外面底部に横もしくは斜方向、体部に縦方向、口縁部に横方向のハケがある。内面に横方向のハケがあり、底部には縦方向のハケもある。95・96も口縁～底部片で、底部に丸みのある小型のものである。97は外面に縦方向のハケがある。内面に工具痕が残存する。98～101は土師器の高坏である。

98は低脚高坏の脚～裾部片である。裾近くの脚部に穿孔していない円形の凹みがある。裾部は屈折する。99は坏底～脚部片であり、外面の摩滅が著しいため脚部にナデがあることがわかるだけである。100は脚～裾部片であり、外面に縦方向のナデがある。101は坏底～脚部片であり外面脚部と坏部の接合部分に縦方向のハケの痕跡が若干残る。

102～108は須恵器の坏蓋である。102～107は6～7世紀のものである。108は頂部片である。109～119は須恵器の坏身である。116は底部外面に「+」のヘラ記号がある。109～114は6世紀後半のものである。115～119は7世紀のものである。120は須恵器の高坏で脚部片である。脚部を2分する部分に浅い沈線が1条ある。この沈線の上下に長方形のスカシが2段ある。このスカシは2方向に存在する。

121・122は無頸壺である。122は底部外面中央が凹む。123は須恵器の短頸壺である。124は甕で体部片である。肩部に横方向のカキ目があり、円孔が開けられている。125は壺で体部片である。肩部に横方向のカキ目がある。甕の可能性もある。126は須恵器の甕で頸部片である。

127は石製模造品の勾玉である。滑石製で両面ともに擦痕が残存する。128は金銅製品の耳環である。

SD45 (Fig. 46) 129は土師器の台付甕の口縁部片である。外面頸部にタタキの痕跡が残存する。130は甕の口縁部片である。外面の頸部に縦方向のハケ、内面に横方向のハケがある。131は甕の把手である。

SD52 (Fig. 46) 132は須恵器の壺の底部片である。貼り付け高台である。

SD56 (Fig. 46) 133・134は須恵器の坏身である。133は6世紀のものである。134は須恵器坏身である。

遺構外 (Fig. 47) 135～138は土師器の壺である。135は口縁～体部片で外面の頸～体部にか

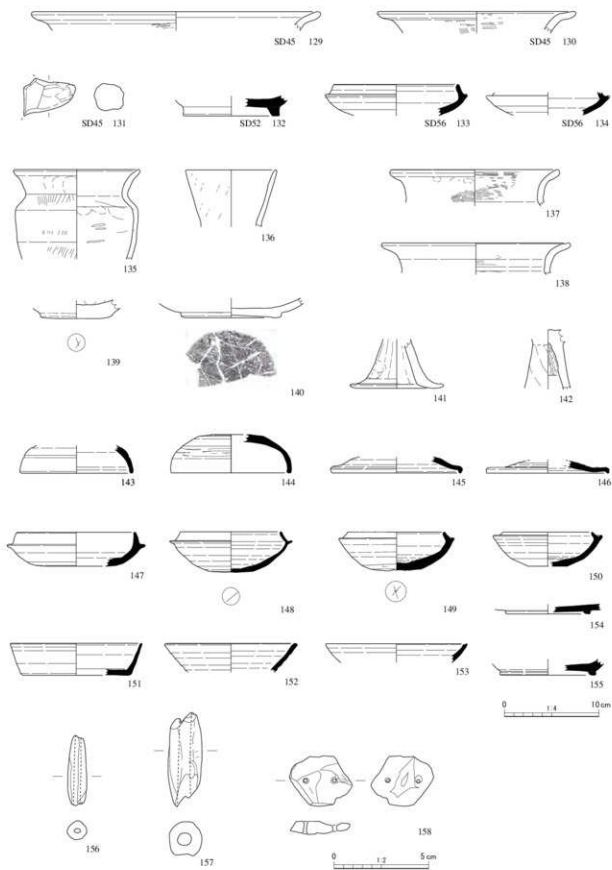


Fig. 46 V区SD45·52·56·遺構外出土遺物

けて縦方向のハケ、内面はナデがある。136は直口壺の口縁部片である。137は底部片で底部外面に「X」のヘラ記号が残存する。138は底部片で底部外面に葉脈圧痕が残存する。139・140は土師器の甕であり、口縁～頸部片である。139は外面頸部に縦方向のハケ、内面口縁部に横方向のハケがある。140は内面頸部に横方向のハケが残存する。141・142は土師器の高坏である。141は低脚高坏の脚～裾部片であり裾部は屈折する。142は坏底～脚部片であり外面脚部に斜方向のナデがある。

143～146は須恵器の天盖である。143は沈線が1条ある。145は、平たい擬宝珠状のツマミがつくもの。やや器高が高い。146は平たい擬宝珠状のツマミがつくもの。143・144は6世紀後半、145・146は古代のものである。147～154は須恵器の坏身である。148は底部外面に「一」のヘラ記号がある。149は底部外面に「X」のヘラ記号がある。151はいわゆる箱坏で高台のないもの。152は口縁部片である。154は底部片で貼り付け高台である。147は6世紀148・149は6～7世紀、150は7世紀、151・154は古代のものである。153は須恵器の皿の口縁部片であり、内外面に重ね焼き時の溶着防止剤の跡がある。155は須恵器の高台部片であり、壺の底部と考えられる。156・157は土鍾である。156は細身のもので、157は156に比して太く大きいものである。158は石製模造品で双孔円板の破片である。両面とも剥離が多く当初の面の残存が少ない。残存する面に擦痕がある。

第3章 後論

今回の恒武西宮遺跡の発掘調査での特徴は、中世以降に関わる遺物の出土が極めて少なかった点である。これは当該地が畑地であるため、農地の造成時に結果として除去された可能性が高いと思われる。また、遺構についても確認し得ていない。また古代の遺物も散見するが、これも遺構に伴ったものではなく、攪乱や耕土中から出土したものであった。古代の遺構についても確認し得ていない。

さて、今回の調査で確認した遺構のうち、SD47を中心とした古墳時代後期のものとそれに伴う掘立柱建物（小穴群）が主要なものである。また、平成8～10年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った調査でも確認されているが、当該地区には概ね北東から南東へ流れる溝が複数存在し、それらの溝の間に掘立柱建物が配置され利用されていた。このことは今回の調査でも不明瞭ながら、Ⅱ区のSH1、Ⅲ区のSH2、V区の小穴群として確認している。

(1) 溝状遺構の時期について

ここでは、今回の調査で確認した遺構の時期について溝状遺構を中心に若干の考察を加えたい。

まず、全体の中で最も古い時期（Ⅰ期）に属する遺構としてはV区で確認したSD74があげられる。これはSD47と重複し、その新旧関係からそれよりも古いことが分かっている。但し、SD74からは遺物が出土していないため、時期について確実なことを述べることは困難である。

そこで、SD74と関連しそうな遺構を検討してみたところ、その東側にほぼ同じ方向のSK18が存在することがわかる。ここから土師器の有稜高坏がほぼ完形の状態出土していることから、SD74もほぼ同時期に存在していたと推察できる。そのため、SD74・SK18は古墳時代（5世紀）の遺構と考えている。このSD74と関連してSD60～64・66・84がほぼ同一方向を向くことを指摘しておく。そのうちSD60・SD61はSD74の西側に近接する。そのため、並列していた可能性が高い。この溝からも遺物が出土していない。但し、SD60・SD61はSD74に比べて浅いものである。また、他の溝についても並列していた可能性もあるが古墳時代の土師器の小片が出土するのみであることから、時期について確定できない。

次にⅡ期として、先述したSD47があげられる。この溝は今回の調査で、最も主要な遺構の一つである。この遺構は北東から南西へ流れる溝で、土層観察から大きく3層に分かれる。埋まり始めた緩やかな流れの時期（下層）、やや水量の増した砂を伴う堆積時（中層）、そして最終段階の緩やかな流れから滲んだ時期（上層）に分けられる。下層から、金銅製の耳環や須恵器坏身・甕、土師器片などが出土し、須恵器坏身が目立つ。中層からは土師器の小片が出土するが多くない。上層からは滑石製の石製模造品の勾玉、土師器の甕・甕などが出土し、土師器の甕・甕などの煮沸具が目立つ。下層の時期はこの溝が本質的に機能していた時期のものであり、出土位置はやや中心部による傾向がみられる。しかし、上層の時期には、出土位置が北に寄る傾向があり、より中心側にある遺物の上に北側の遺物がのるような状態で出土している。そのため、上層の遺物は溝の北側から入れられたと考えられる。但し、石製模造品はその中でも最も上層で確認し、溝のやや中心部に寄った場所で出土した。このように上層と下層では出土状況に違いが存在するが遺物の時期としては大きな差はなく、下層から出土した甕がやや古い様相を示すが、概ね古墳時代後期の6～7世紀のものである。この遺構に関連する溝状遺構はV区のSD45、Ⅰ区のSD43、Ⅲ区のSD5、Ⅳ区の

SD11である。このうち、遺構の配置状況からSD43とSD47が、SD5とSD11が同一遺構と判断できる。そしてこれらの溝は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が確認したSR4・5がSD43とSD47と、SR3がSD5とSD11と同一遺構であると判断できる。また、SD45については同一遺構の存在については過去の調査では確認しえていないと思われる。また、SD46・48・50・80についてはSD47に並列するように確認できたことから、同時期の遺構と推察することも可能であるが、その関係性については不明である。

最も新しい溝（Ⅲ期）が、V区で確認したSD51・SD52・SD56である。これは「L」字状の溝で掘削後の状況から2本の溝が交錯している可能性が考えられるが、掘削時の平面観察や土層観察からは、その状況を確認しえなかった。この溝の下から、柱穴と判断できる小穴を確認していることから、後述する小穴群の時期より新しいと判断した。この溝の時期については、古墳時代の土師器片

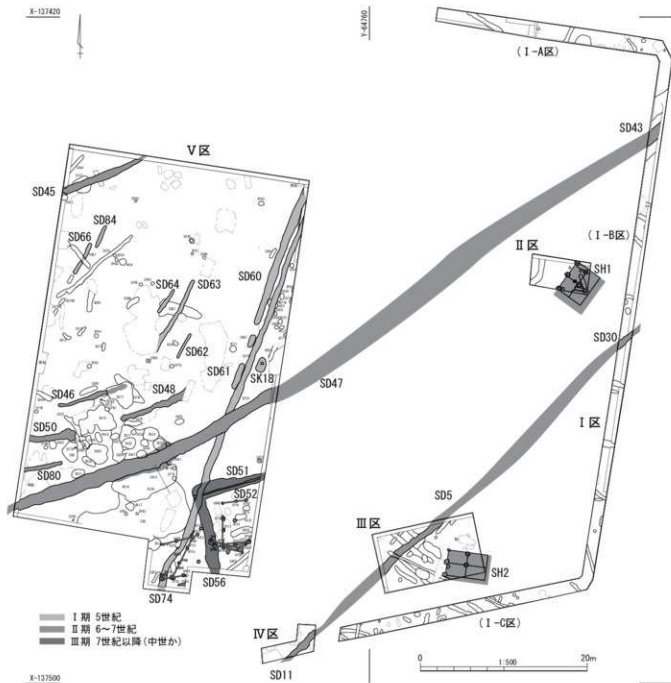


Fig. 47 恒武西宮遺跡 21 次調査主要遺構配置図 (S=1/500)

が少量出土しただけで詳細な時期については不明である。古墳時代以降の溝と述べるにとどめておきたい。また、SD46・48・50・80についてはSD47に並列するように確認できたことから、同時期の遺構と推察することも可能であるが、その関係性については不明である。

(2) 掘立柱建物の時期および小穴群の組み合わせ

掘立柱建物については、Ⅱ区のSH1、Ⅲ区のSH2を確認している。その他にⅤ区で柱穴と考えられる、小穴群を確認している。SH1は5基の柱穴から成立すると考えているが、西側で確認した3基と東側で確認した2基の間にズレが生じていることが確認できるため、別々の遺構である可能性もある。しかし、西側の3基の西側には柱穴と判断できる遺構を確認しなかったため、5基の柱穴を一連の遺構として判断している。これらの抜き取り跡から土師器の甕や高坏が出土し古墳時代の遺構と判断した。SH2も5基の柱穴から成立するが、SH1よりも柱穴の配置に規則性があり、掘立柱建物が存在したと判断できる。SH2については出土遺物がないため、時期の決定は困難である。

Ⅴ区で確認している小穴群はSP36とSP44、SP47とSP46、SP53とSP54がそれぞれ重複していることなどから少なくとも2時期以上の遺構が重複していると判断できる。また、上記の小穴などの南側にあるものは、柱痕の存在が確認でき大きく深い傾向にあるのに対して、SP40～42、51・57・58などの北側あるものは小さく浅い傾向にある。このことや遺構配置から判断して、各々の遺構の組み合わせについてはその判別が極めて困難であった。図にはいくつかの組み合わせ案を示してみたが、掘立柱建物とするには判断材料が限られたため、柵列状のものと判断した。それらは4種類の方向性が見えるようである。さて、これらの小穴群の時期についてであるが、SD47とSD5・11に区画された部分に立地していることから関連性が考えられる。また、SP32がSD74の埋土の上から掘られていることやSP46・47を削るようにSD56が設置されていることからSD74とSD56の間の時期と判断できる。この間の遺構としてSD47が存在するため、これらの小穴群もSD47とほぼ同時期のものであろうと考え、6～7世紀頃の小穴群であると推察した。

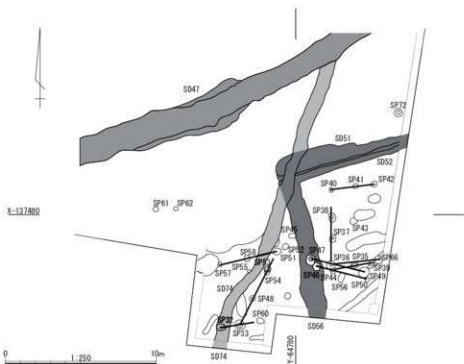


Fig. 48 小穴群配置案 (S=1/250)

第4章 総括

(1) 古墳時代前期～中期

恒武西宮遺跡では古墳時代前期から遺構が確認されているが、確認された箇所は遺跡の東側に集中している。遺跡の西側にあたる今回の調査箇所では、前期の遺構・遺物は検出されなかった。古墳時代中期の遺構としては、V区のSK18が確認できた。SK18からは5世紀の土師器の高坏がほぼ完形で出土しており、SK18と同時期とみられるSD74などの複数の遺構が、古墳時代中期のものと考えられる。また、古墳時代中期の特筆できる遺物としては、V区のSD47で出土した滑石製模造品の勾玉と、V区表土で出土した石製双孔円盤が挙げられる。山ノ花遺跡1次調査の恒武大溝や恒武西宮遺跡1次調査のSF9では、滑石製模造品が大量に出土したが、今回の調査区からは前述の2点が出土した。SD47からの出土遺物は古墳時代後期のものが主体だが、溝周辺の集落は古墳時代

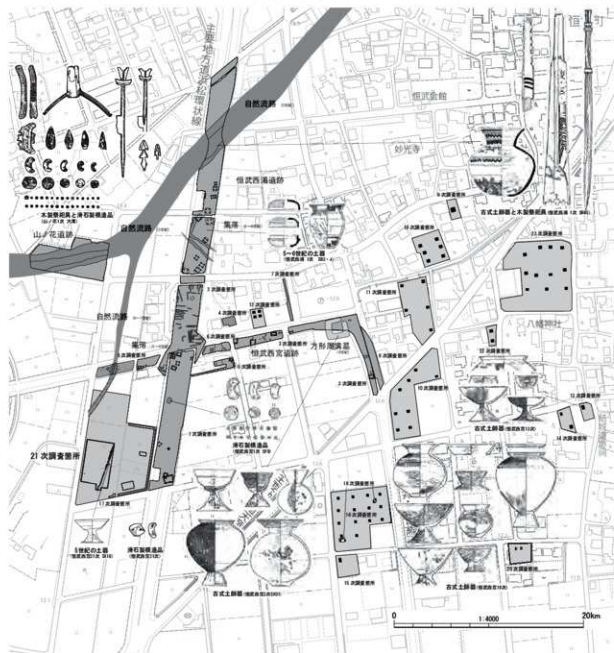


Fig. 49 古墳時代前期・中期の様相 (S=1/4000)

中期から存在していた可能性がある。同敷地内で行った予備調査（17次調査）では、調査箇所全域から5世紀代の土師器が出土している。また、今回の調査区の東にある恒武西宮遺跡1次調査区では、5世紀の掘立柱建物跡などが確認されている。21次調査では古墳時代中期の遺物はわずかであったが、当該地は古墳時代中期においても人々の活動の範囲にあったと考えられる。

(2) 古墳時代後期

全ての調査区で古墳時代後期の遺構を確認できた。遺構は溝（自然流路）、掘立柱建物跡、小穴群などを検出した。SD5・SD11・SD30やSD43・SD47は、平成8年に（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した調査で検出した自然流路の続きと考えられる。これらの溝は北東から南西にかけて検出されており、並行した溝の間に掘立柱建物が配置されている。SD47からは6世紀～7世紀の須恵器、土師器等が豊富に出土した。須恵器の器種は坏身、蓋、はそうが多く、土師器は甕や甔が多い。また、SD47の下層から耳環が一点出土していることが注目される。恒武西宮遺跡周辺で出土する祭祀遺物は古墳時代中期のものが多いが、後期においても遺跡内で祭祀が行われていた

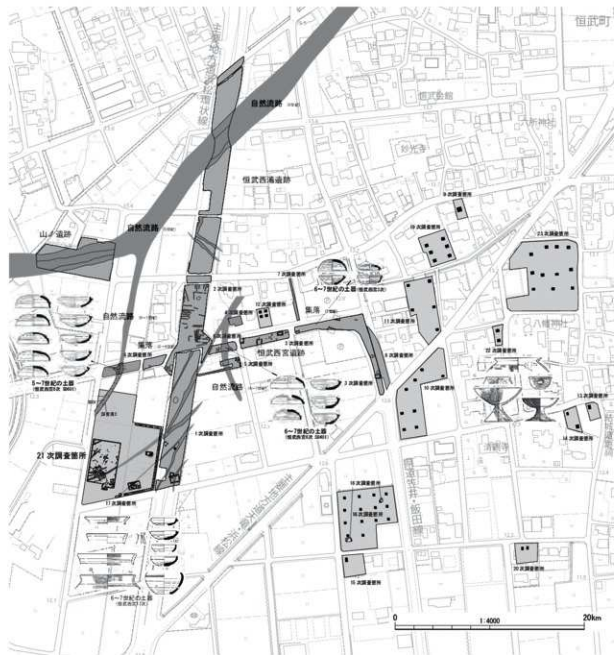


Fig. 50 古墳時代後期の様相 (S=1/4000)

可能性がある。

掘立柱建物跡は、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅴ区で検出された。柱穴とみられる小穴内からは、6世紀～7世紀の土師器片などが出土している。過去の発掘調査では、6次調査E区周辺に5世紀～6世紀の集落、6次調査D区SD401以東に7世紀代の集落があったとみられている。また、1次調査区南端では、古墳時代中期～後期の掘立柱建物跡が確認されている。今回検出された掘立柱建物跡は、6世紀～7世紀のものと考えられ、Ⅴ区SD47以南にも集落域が形成されていたと考えられる。また、Ⅴ区で検出された掘立柱建物跡の中には位置が重複しているものがあり、建物には少なくとも2時期の変遷があるとみられる。掘立柱建物の配置にはならないが一連のものともみられる小穴群もあり、柵列があった可能性がある。

(3) 恒武西宮遺跡の性格

恒武西宮遺跡は、古墳時代から戦国時代まで続く複合遺跡である。今回の調査では、古墳時代を中心とした遺構・遺物を確認できた。一部、古墳時代中期の遺物を含むが、主に古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。恒武西宮遺跡の古墳時代の様相について、周辺の調査結果をふまえて検討する。

古墳時代前期は、恒武西宮遺跡3次調査のB区に方形周溝墓と土器集積がみられるのみで不明な点が多かったが、最近の予備調査で前期の遺物の出土例が増加している（恒武西宮遺跡19次調査、20次調査、23次調査）。今後の調査で、古墳時代前期の集落域が明らかになる可能性がある。古墳時代中期～後期の遺構は、恒武大溝の南側の恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡の範囲に広がっている。また、山ノ花遺跡で検出された恒武大溝からは、古墳時代中期の祭祀遺物が豊富に出土しており、首長層による祭祀が執り行われていたことが伺える。

では、古墳時代中期～後期の首長層の居住域や、首長層を支える民衆の居住域はどこにあったのか。恒武西宮遺跡、恒武西浦遺跡では、中期～後期の掘立柱建物跡や竪穴建物跡など集落関連の遺構が確認できている。両遺跡内では散在的に祭祀遺物が出土しており、集落内で祭祀が行われていた可能性もあることから、恒武大溝で行われた祭祀との関連が伺える。また、恒武大溝から出土した祭祀遺物には、大型木製品などの持ち運ぶには不便なものも含まれており、遠隔地に居住域があるとは考えにくい。以上のことから、恒武西宮遺跡や恒武西浦遺跡は、地域の首長層とそれを支える人々の居住域であった可能性のある遺跡といえる。

【参考文献】

- 財団法人浜松市文化協会 1994 『社口遺跡』
- 浜松市教育委員会 1995 『笠井町下飯遺跡』
- 財団法人浜松市文化協会 1998 『山ノ花遺跡』
- 財団法人浜松市文化協会 2000 『御殿山遺跡』
- 財団法人浜松市文化協会 2000 『笠井若林遺跡4次』
- 財団法人静岡県文化財調査研究所 2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
- 財団法人浜松市文化協会 2002 『恒武西宮遺跡』
- 財団法人静岡県文化財調査研究所 2002 『恒武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡』
- 財団法人浜松市文化協会 2003 『御殿山遺跡3次』
- 財団法人浜松市文化協会 2003 『笠井若林遺跡7次』
- 財団法人静岡県文化財調査研究所 2004 『恒武東見遺跡』
- 財団法人静岡県文化財調査研究所 2005 『恒武西宮遺跡Ⅲ 笠井若林遺跡Ⅱ』
- 財団法人浜松市文化財調査財団 2005 『笠井若林遺跡8次』
- 財団法人浜松市文化財調査財団 2009 『恒武西宮遺跡8次』
- 財団法人浜松市文化財調査財団 2009 『笠井遺跡2次』
- 鈴木 一有 2012 『天竜川右岸域における古墳時代集落の動態』『考古学研究会例会シンポジウム記録8 南瀬古墳の変化と南瀬・古墳時代集落研究の再検討』考古学研究会

出土遺物観察表

凡例

「残存率」 全体における残存している割合を% (5%きざみ) で示す

「反」 反転して図化したもの

大きさの単位は「cm」 重量の単位は「g」

「色調」は『標準土色粘』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に準拠している

遺物観察表(1)

Fig. 番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口縁長さ	器高さ	底径幅	色調	焼成	備考			
39	1	64	I-8	1 Ⅲ	SK7	土師器	小型丸底壺	底部	25	-	-	3.9	-	にぶい褐色	良	外面ナデ 内面ユビオサエ	
39	2	155	I-8	1 Ⅲ	SD36	須恵器	坏壺	天~肩部	30	反	-	2.7	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ナデ	
39	3	57	I-8	1 Ⅲ	SD43	土師器	高坏	坏部	15	-	-	2.8	-	褐色	やや良	内外面 ナデ	
39	4	52	I-8	1 Ⅲ	SD43	土師器	高坏	底~脚部	5	-	-	3.2	-	にぶい褐色	良	外面 ナデ	
39	5	41	I-8	1 Ⅲ	SD43	土師器	高坏	脚~底部	10	-	-	6.5	-	褐色	良	外面 ナデ	
39	6	35	I-8	1 Ⅲ	SD30	土師器	小型丸底壺	脚~底部	90	-	-	7.0	-	にぶい黄褐色	良	外面 ヌズリ・ナデ 内面 ヌビオサエナデ	
39	7	5	I-8	1 Ⅲ	SD30	須恵器	坏壺	天~口縁部	45	反	(13.4)	3.6	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 回転ケズリ 内面天頂部 ナデ	
39	8	129	I-8	1 Ⅲ	SD31	土師器	低胎高坏	脚~底部	15	-	-	5.0	-	にぶい褐色	良	厚減により不明	
39	9	47	I-8	1 Ⅲ	遺構外	土師器	高坏	坏底~底部	10	-	-	7.3	-	にぶい褐色	やや良	外面 回転ナデ・ナデ	
39	10	32	I-A	1 Ⅲ	遺構外	須恵器	罐	肩部	5	未	反	2.8	-	灰色	良	肩部 刺突文 孔部 縁方向の力かけ目	
39	11	18	I-8	1 Ⅲ	遺構外	須恵器	坏壺	体~口縁部	5	反	(12.3)	3.85	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 回転ケズリ	
39	12	29	I-8	1 Ⅲ	遺構外	須恵器	坏身	口縁~体部	5	未	反	(10.4)	2.6	-	灰白色	不良	内外面 回転ナデ
39	13	7	I-8	1 Ⅲ	遺構外	土師器	内耳鍋	口縁~内耳部	5	未	-	1.25	1.5	-	灰白色	良	口縁部 黒ヨコナデ
40	14	8	Ⅱ	1 Ⅲ	SP1	土師器	高坏	坏底~底部	15	-	-	5.6	(9.2)	褐色	良	脚部 ヌビナデ 坏部不明確	
40	15	59	Ⅱ	1 Ⅲ	SP11	土師器	高坏	坏部 口縁~	5	反	(16.8)	4.2	-	褐色	やや良	外面 タテナデ 内面 ヌビコケ	
40	16	37	Ⅱ	1 Ⅲ	SP5	土師器	壺	口縁~肩部	10	反	(2.0)	5.2	-	にぶい褐色	良	輪縁成形 内外面 回転ナデ・ナデ	
40	17	31	Ⅱ	1 Ⅲ	SD2	須恵器	罐	肩部	10	反	-	6.25	-	灰色	良	肩部 5条のクシガキ波状文 内外面 回転ナデ	
40	18	132	Ⅱ	2 Ⅲ	SD21	土師器	壺	口縁~肩部	5	未	-	2.5	-	褐色	良	内外面 ナデ	
40	19	61	Ⅱ	1 Ⅲ	SP16	土師器	壺	頸部	5	未	反	3.2	-	灰白色	良	外面 タテハケ・ヨコナデ 内面 ヌビコケ	
40	20	151	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	土師器	平底壺	口縁~底部	85	-	(13.4)	18.5	6.8	-	にぶい黄褐色	良	輪縁成形 外面 タテハケ 内面 タテハケ後ナデ
40	21	74	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	土師器	台付甕	脚部	10	-	-	7.05	(10.2)	灰黄褐色	良	外面 タテハケ	
40	22	98	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	土師器	高坏	脚部	15	-	-	4.85	-	褐色	やや良	外面 ナデもしくはミガキカ	
40	23	69	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	土師器	高坏	脚部	10	-	-	10.8	-	濃黄褐色	良	外面 タテハケ後、ナデ	
40	24	72	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	土師器	高坏	脚~底部	10	-	-	4.4	-	褐色	良	外面 ナデ	
40	25	73	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	須恵器	坏壺	天~口縁部	95	-	-	12.9	4.4	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
40	26	71	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	須恵器	坏壺	天~口縁部	15	反	(13.0)	3.6	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ	
40	27	70	Ⅲ	1 Ⅲ	SD5	須恵器	坏身	体~底部	30	反	(13.1)	4.0	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ	
40	28	160	Ⅲ	1 Ⅲ	SD7	土師器	壺	体~底部	15	反	-	12.9	(5.2)	にぶい黄褐色	良	外面底部 ナデ 内面 ヌビコケ	
40	29	158	Ⅲ	1 Ⅲ	SD7	土師器	台付甕	脚部	5	未	-	3.3	-	褐色	良	外面 タテハケ	
40	30	28	Ⅲ	1 Ⅲ	遺構外	須恵器	高坏	脚部	5	反	-	4.4	-	灰白色	良	外面脚部 回転ナデ	
40	31	15	Ⅲ	1 Ⅲ	遺構外	須恵器	坏身	坏部	30	反	-	2.65	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ	
40	32	19	Ⅳ	1 Ⅲ	SD11	須恵器	坏身	口縁~体部	10	反	(13.3)	3.2	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ	
41	33	138	V	1 Ⅲ	SP26	土師器	壺	口縁部	5	未	-	1.9	-	にぶい黄褐色	良	内外面 ナデ	
41	34	44	V	1 Ⅲ	SK8	土師器	瓶	把手	5	-	-	5.75	3.35	2.8	濃黄褐色	良	外面 ナデ
41	35	46	V	1 Ⅲ	SK8	土師器	瓶	把手	5	-	-	5.05	4.4	3.3	にぶい褐色	良	外面 ナデ
41	36	23	V	1 Ⅲ	SK8	須恵器	坏壺	天~口縁部	10	-	(10.9)	3.4	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ	
41	37	27	V	1 Ⅲ	SK8	須恵器	坏壺	天~口縁部	10	反	(13.7)	1.6	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ	
41	38	156	V	1 Ⅲ	SK8	須恵器	坏身	口縁~底部	5	未	反	(10.0)	3.0	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
41	39	11	V	1 Ⅲ	SK10	須恵器	坏壺	天~口縁部	5	未	反	(10.0)	2.7	-	灰色	良	内外面 ナデ
41	40	21	V	1 Ⅲ	SK10	須恵器	坏身	口縁~底部	95	-	-	9.6	3.9	4.9	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
41	41	38	V	1 Ⅲ	SK11	土師器	壺	口縁~肩部	5	反	(19.8)	4.15	-	にぶい黄褐色	良	内外面 回転ナデ・ナデ	
41	42	62	V	1 Ⅲ	SK11	土師器	壺	口縁~肩部	5	未	反	(18.6)	4.8	-	黄褐色	良	外面 タテハケ 内面 ヌビコケ
41	43	13	V	1 Ⅲ	SK11	須恵器	坏壺	体~口縁部	5	未	反	-	2.3	(8.2)	灰色	良	内外面 ナデ
41	44	22	V	1 Ⅲ	SK11	須恵器	坏壺	天~口縁部	25	-	-	4.4	-	灰色	良	外面 ナデ	
41	45	1	V	1 Ⅲ	SK11	須恵器	坏身	口縁~底部	65	-	-	4.35	-	灰色	良	外面 ナデ	
41	46	145	V	1 Ⅲ	SK11	須恵器	無蓋高坏	坏部	5	未	-	3.4	-	灰色	良	外面 ナデ	
41	47	130	V	1 Ⅲ	SK11	土師器	高坏	坏底~底部	60	反	(11.6)	6.2	-	濃黄褐色	良	内外面 回転ナデ 内外面 回転ナデ	
41	48	43	V	1 Ⅲ	SK11	土師器	高坏	底~脚部	5	反	(13.2)	5.6	-	褐色	良	外面天頂部 ケズリ 内外面 回転ナデ	
41	49	49	V	1 Ⅲ	SK11	土師器	高坏	坏底~脚部	5	反	(10.7)	6.4	-	褐色	良	外面天頂部 回転ケズリ	

遺物観察表(2)

Fig. 番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	細別	部位	残存	反転	口径長さ	器高深さ	底径幅	色調	焼成	備考	
41	50	50	V	1面 SX11	土師器	高坪	坏皮～脚部	5	反	-	4.8	-	にぶい褐色	良	内外面 回転ナデ 内面坪部 回転ナデ
41	51	25	V	1面 SX11	滑石器	高坪	坏皮～脚部	10	-	-	3.45	-	灰白色	良	外周～坪部 回転ナデ 外周頂部に「J」のへう記号
41	52	2	V	1面 SX14	滑石器	坪蓋	天～口縁部	60	-	(11.9)	4.8	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 内外周頂部 回転ケズリ
42	53	113	V	1面 SK15	土師器	高坪	脚～脚部	5	反	-	2.1 (14.4)	-	にぶい黄褐色	良	内外面 回転ナデ
42	54	36	V	1面 SK18	土師器	高坪	ほぼ完形	95	-	14.5	10.1	9.2	褐色	良	外周 回転ナデ・ナデ 内面 ナデ
42	55	54	V	1面 SK18	土師器	高坪	脚縁部	10	反	-	4.5	-	褐色	良	外周 ナデ
42	56	148	V	1面 SK20	土師器	壺	頸～胴部	5	反	-	7.4	-	にぶい黄褐色	良	外周 タテハケ後ナデ 内面 タテハケ後ナデ 外周底部に「入」のへう記号
42	57	24	V	1面 SK20	滑石器	坪身	口縁～底部	30	-	(9.4)	4.4	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外周底部 ケズリ
42	58	33	V	1面 SK22	滑石器	高坪	脚部	10	反	-	7.2	-	灰白色	良	長方形のスカシ上下2段 上下のスカシ間に2条の波線
42	59	9	V	1面 SK24	土師器	鉢	底部	5	反	-	3.1	7.5	にぶい黄褐色	良	外周 ハケ後ナデ 内面 ハケ
42	60	10	V	1面 SK31	滑石器	坪身	口縁～底部	30	反	(10.0)	3.9	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外周底部 ケズリ
42	61	142	V	1面 SK32	土師器	壺	体～底部	30	-	-	16.5	8.4	にぶい黄褐色	良	外周底部に木葉痕 外周 タテ ハケ 内面 横からナメハケ
42	62	140	V	1面 SP58	土師器	壺	口縁～頸部	5	反	(21.6)	2.9	-	にぶい褐色	良	外周 タテハケ後ナデ 内面 ヨコハケ後ナデ
42	63	162	V	1面 SP83	土師器	壺	頸～体部	10	反	-	6.1	-	にぶい黄褐色	良	外周 タテハケ 内面 ナメハケ後ナデ
42	64	157	V	1面 SP83	土師器	壺	口縁～底部	70	-	17.0	26.7	-	褐色～黒褐色	良	外周 ナメハケ 内面 ヨコハケ 外周 ナメハケ
43	65	147	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～体部	15	反	(27.4)	14.6	-	にぶい褐色	良	内面 ヨコハケ 口縁部 ヨコナデ 外周 ヨコハケ・タテハケ
43	66	75	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～胴部	5	反	(11.6)	7.4	-	にぶい黄褐色	良	内面 横方向の横ナデ・ ヨコハケ 外周 タテハケ 内面 ヨコハケ後ナデ
43	67	80	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～体部	15	反	(14.6)	10.5	-	にぶい黄褐色	良	外周 タテハケ 内面 ヨコハケ後ナデ
43	68	66	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁部	5	反	(15.4)	3.2	-	にぶい黄褐色	良	外周 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	69	94	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～体部	5	反	(13.7)	8.4	-	にぶい黄褐色	良	外周 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	70	161	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～底部	95	-	13.7	22.85	-	褐色	やや不良	内面 ヨコからナメハケ
43	71	137	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～胴部	10	反	(23.8)	4.55	-	淡黄褐色	良	内外面 ナデ
43	72	85	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～胴部	5	反	(17.6)	4.05	-	淡黄褐色	良	内外面 タテハケ後ナデ
43	73	102	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～体部	10	反	(17.3)	7.3	-	灰白色	やや不良	内外面 ナデ
43	74	83	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～胴部	5	反	(15.8)	4.1	-	淡黄褐色	良	内外面 回転ナデ 内周頸部 ヨコハケ
43	75	92	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～胴部	5	反	(15.4)	4.75	-	にぶい黄褐色	普通	外周 ナデ 内面 ヨコハケ
43	76	101	V	1面 SD47	土師器	壺	口縁～体部	15	反	(16.7)	11.6	-	褐色	良	外周 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	77	78	V	1面 SD47	土師器	台付壺	脚台部	10	-	-	5.6	-	褐灰色	良	外周 タテハケ 内面 ヨコハケ
43	78	86	V	1面 SD47	土師器	台付壺	脚台部	5	反	-	2.8	-	褐灰色	良	外周 タテハケ
43	79	96	V	1面 SD47	土師器	台付壺	壺底～胴部	5	-	-	6.05	8.6	淡黄褐色	良	外周 タテハケ後ナデ 内面 ナデ 外周 タテハケ
43	80	123	V	1面 SD47	土師器	台付壺	脚台部	15	-	-	9.5	10.8	灰黄色	良	内周頸部 ヨコハケ
43	81	109	V	1面 SD47	土師器	台付壺	脚台部	5	反	-	5.4 (13.8)	-	灰黄色	やや良	外周 タテハケ 内面 横ナデ
43	82	110	V	1面 SD47	土師器	台付壺	脚台部	5	反	-	3.4 (9.0)	-	淡黄褐色	やや良	外周 タテハケ 内面 ヨコハケ
44	83	89	V	1面 SD47	土師器	二重口縁壺	口縁部	5	反	(17.6)	4.9	-	淡黄褐色	良	外周 横ナデ後ハケ
44	84	114	V	1面 SD47	土師器	甗	口縁～底部	40	反	(21.0)	25.8 (9.0)	-	にぶい黄褐色	良	造形し 外周 タテハケ 内面 ヨコハケ
44	85	131	V	1面 SD47	土師器	甗	口縁～体部	15	反	(26.2)	23.35	-	にぶい黄褐色	良	外周 タテハケ後ヨコナデ 内面 ヨコハケ後ヨコナデ
44	86	139	V	1面 SD47	土師器	甗	体～把手	5	-	(22.6)	11.2	-	淡黄褐色	良	外周 厚減のため不明 内面 ヨコハケ
44	87	91	V	1面 SD47	土師器	甗	把手～体部	5	-	5.0	6.1	3.1	にぶい黄褐色	普通	外周 タテハケ後、把手を備付 けハケ後ナデ 内面 ナデ
44	88	68	V	1面 SD47	土師器	甗	把手	5	-	5.3	7.3	3.6	淡黄褐色	良	外周 タテハケ後、把手を備付 け後ナデ 内面 ナデ
44	89	118	V	1面 SD47	土師器	甗	把手	5	-	3.9	7.4	3.4	灰白色	良	外周 ハケ
44	90	116	V	1面 SD47	土師器	甗	把手	5	-	4.5	7.35	3.8	にぶい黄褐色	良	外周 ナデ

遺物観察表(3)

Fig. 番号	実測番号	調査区	遺構・層位	種別	類別	部位	残存	反転	口縁長さ	器高	底径	底径幅	色調	焼成	備考
44	91	77	V	I Ⅲ S047	土師器	甕	把手	5	-	4.2	5.25	3.4	にぶい黄褐色	良	外面 ナデ
44	92	87	V	I Ⅲ S047	土師器	甕	把手	5	-	3.85	4.55	3.45	褐色	良	外面 ナデ
44	93	111	V	I Ⅲ S047	土師器	甕	把手	5	-	7.1	4.8	3.4	にぶい褐色	良	外面 ナデ
44	94	100	V	I Ⅲ S047	土師器	鉢	口縁~底部	20	反	(14.2)	7.15	-	にぶい黄褐色	良	内外蓋 ヨコハケ・タテハケ
44	95	97	V	I Ⅲ S047	土師器	鉢	口縁~底部	90	-	(10.8)	4.7	-	にぶい黄褐色	やや良	内外蓋 ナデ
44	96	99	V	I Ⅲ S047	土師器	鉢	口縁~底部	20	反	(13.2)	5.05	-	にぶい褐色	やや良	内外蓋 ナデ
44	97	125	V	I Ⅲ S047	土師器	鉢	口縁~底部	80	-	(8.4)	4.4	4.5	にぶい黄褐色	良	外面 ユビオサエ後タテハケ 内面 ココナデ 坪部の接合時に粘土充填
44	98	107	V	I Ⅲ S047	土師器	高坪	脚部	15	-	-	4.75	(9.0)	褐色	やや不良	外面脚部に円形のくぼみあり 外面 ナデ
44	99	88	V	I Ⅲ S047	土師器	高坪	坪面~脚部	25	-	-	6.55	-	褐色	良	外面 ナデ
44	100	104	V	I Ⅲ S047	土師器	高坪	脚~脚部	10	-	-	4.85	-	淡黄褐色	良	外面 タテナデ
44	101	108	V	I Ⅲ S047	土師器	高坪	坪面~脚部	5	反	-	5.05	-	褐色	やや良	外面 タテハケ
45	102	84	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	天~体部	70	-	-	3.9	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	103	53	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	天~口縁部	15	反	(14.3)	3.0	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	104	55	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	体~口縁部	5	反	(14.6)	2.8	-	灰色	良	外面天蓋部 ケズリ 内外蓋 回転ナデ
45	105	106	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	天~口縁部	25	反	(11.8)	3.6	-	灰白色	良	外面天蓋部 ケズリ 内外蓋 回転ナデ
45	106	126	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	天~口縁部	60	-	10.6	4.4	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ
45	107	105	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	天~口縁部	20	-	(10.8)	4.3	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	108	154	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪蓋	天部	30	-	-	2.3	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	109	51	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	30	反	(11.6)	4.1	-	灰白色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	110	90	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	30	反	(11.8)	3.95	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	111	87	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	15	反	(9.8)	3.4	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	112	115	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	25	反	(13.0)	4.4	-	灰白色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	113	112	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	体部	5未	反	-	3.2	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	114	103	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	体~底部	10	反	-	3.55	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	115	82	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	95	-	11.0	3.45	3.9	灰白色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	116	81	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	50	-	(9.9)	4.01	5.5	灰白色	良	底部に「J」のへう記号 内外 蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	117	60	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	80	-	(10.4)	4.65	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	118	58	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~底部	95	-	9.2	4.2	5.0	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	119	95	V	I Ⅲ S047	須恵器	坪身	口縁~体部	10	反	(10.0)	2.85	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面天蓋部 ケズリ
45	120	122	V	I Ⅲ S047	須恵器	高坪	脚部	10	反	-	5.9	-	灰白色	良	長方形のスカシ上下2段2方 向 外面 回転ナデ
45	121	119	V	I Ⅲ S047	須恵器	無蓋蓋	口縁~底部	25	反	(7.7)	5.85	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 底部がくぼむ
45	122	121	V	I Ⅲ S047	須恵器	無蓋蓋	口縁~底部	45	反	(8.0)	5.2	-	灰白色	良	内外蓋 回転ナデ
45	123	76	V	I Ⅲ S047	須恵器	短頸蓋	頸~底部	70	-	-	10.5	4.1	灰白色	不良	内外蓋 回転ナデ 底部に穿孔 孔径 1.4 脚部にカキ目 外面 回転ナデ 内面 ユビオサエ
45	124	117	V	I Ⅲ S047	須恵器	罐	頸~底部	15	反	-	6.9	-	灰色	良	外面肩部にカキ目 外面 回転ナデ
45	125	93	V	I Ⅲ S047	須恵器	罐	頸~体部	10	反	-	4.95	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ 外面 回転ナデ
45	126	124	V	I Ⅲ S047	須恵器	甕	頸部	5	反	-	5.2	-	灰色	良	内外蓋 回転ナデ
45	127	127	V	I Ⅲ S047	石製模造品	勾玉	変形	100	-	3.1	0.4	1.2	灰色	-	重量 4 表面面 磨痕あり
45	128	79	V	I Ⅲ S047	金属製品	耳環	変形	100	-	2.42	0.5	2.65	明緑灰色	-	重量 7 金銅製品か
46	129	63	V	I Ⅲ S045	土師器	台付甕	口縁~脚部	5未	反	(30.0)	2.0	-	にぶい黄褐色	良	外面 タテハケ・ココナデ 内面 ココナデ
46	130	135	V	I Ⅲ S045	土師器	甕	口縁部	5未	反	(20.3)	2.3	-	にぶい黄褐色	良	外面 タテハケ後ナデ 内面 ココナデ後ナデ
46	131	42	V	I Ⅲ S045	土師器	甕	把手	5	-	5.5	4.0	3.1	灰白色	良	外面 ナデ
46	132	146	V	I Ⅲ S052	須恵器	甕	底部	5未	反	-	2.1	(9.5)	灰白色	良	貼付け高台 内外面 回転ナデ

遺物観察表(4)

Fig. 番号	実測 番号	調査区	遺構・層位	種類	細別	部位	残存	反転	口径 長さ	器高 厚さ	底径 幅	色調	焼成	備考	
46	132	16	V	1面 S056	須恵器	坏身	口縁~底部	5未	反	(13.0)	3.3	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	134	150	V	1面 S056	須恵器	坏身	口縁~体部	5	反	-	2.4	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	135	128	V	遺構外	土師器	壺	口縁~体部	10	反	(13.1)	9.5	-	灰白色	良	内面 タテハケ後ナデ 内面 ナデ
46	136	120	V	遺構外	土師器	壺	口縁~頸部	10	反	(9.4)	6.0	-	褐色	良	内外面 ハケ後ナデか 底部に「X」のへう記号
46	137	133	V	遺構外	土師器	壺	口縁~頸部	5未	-	-	3.8	7.4	灰褐色	良	内外面ナデ 外面底部に木炭痕
46	138	134	V	遺構外	土師器	壺	口縁~頸部	5未	反	-	3.35	9.3	にぶい褐色	良	内外面 厚減のため不明 外面 タテハケ後ナデ
46	139	65	V	遺構外	土師器	壺	底部	10	反	(17.4)	1.95	-	にぶい黄色	良	内面 ココハケ後ナデ 外面 ナデ
46	140	159	V	遺構外	土師器	壺	底部	5	反	(19.6)	2.1	-	褐色	良	内面 ココハケ後ナデ
46	141	56	V	遺構外	土師器	高坏	脚~初部	5	反	-	5.2	(8.6)	にぶい褐色	やや良	外面 ナデ
46	142	45	V	遺構外	土師器	高坏	脚部	10	-	-	6.75	-	にぶい褐色	良	外面 斜方向のナデ
46	143	143	V	遺構外	須恵器	坏蓋	口縁~体部	5未	反	(11.6)	2.95	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 内外面 回転ナデ 一部板状工
46	144	40	V	遺構外	須恵器	坏蓋	天~口縁部	30	反	(12.6)	4.05	-	褐色	不良	真によるナデ 外面天頂部 回転ケズリ
46	145	26	V	遺構外	須恵器	坏蓋	体~口縁部	5未	反	(13.0)	2.1	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
46	146	149	V	遺構外	須恵器	坏蓋	天~口縁部	5未	反	(12.8)	1.3	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面天頂部 ケズリ
46	147	12	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁~底部	20	反	(12.4)	3.6	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ 外面底部に「-」のへう記号
46	148	17	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁~底部	30	-	(10.6)	4.3	-	灰色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ 外面底部に「X」のへう記号
46	149	20	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁~底部	80	-	10.2	4.1	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	150	6	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁~底部	30	反	(9.4)	3.6	4.0	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 回転ケズリ 内面底部 ナデ
46	151	14	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁~底部	15	反	(13.8)	3.4	(11.1)	灰白色	良	内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ 蹄形(17A)
46	152	153	V	遺構外	須恵器	坏身	口縁~体部	5未	反	(13.6)	3.05	-	灰色	良	内外面 回転ナデ
46	153	30	V	遺構外	須恵器	皿	口縁部	5未	反	(14.8)	2.0	-	灰白色	良	内外面 回転ナデ
46	154	152	V	遺構外	須恵器	坏身	底~高台部	5	反	-	1.05	(8.6)	灰白色	良	貼付け高台 内外面 回転ナデ 外面底部 ケズリ
46	155	144	V	遺構外	須恵器	壺	底部	5未	反	-	1.7	(10.0)	灰色	良	外面 回転ナデ 内面 厚減のため不明
46	156	34	V	遺構外	土製品	土師	ほぼ完形	90	-	3.7	1.0	1.05	灰白色	良	口径 0.3
46	157	39	V区	遺構外	土製品	土師	ほぼ完形	90	-	5.0	1.8	1.75	にぶい黄褐色	良	口径 0.6 タテナデ 重量 7 口径 0.2 裏蓋とも多 くが割離 痕あり
46	158	48	V区	遺構外	石製模造品	及孔円板	-	60	-	2.65	0.7	3.3	灰色	-	断面の一部残存

圖 版

PLATE



1 調査区全景 直上から



2 V区 掘削状況 南西から



1 I-A区 完掘状況 西から



2 I-B区 北側完掘状況 南西から



3 I-B区 完掘状況 北西から



4 I-C区 完掘状況 西から



1 I区 SD30 掘削状況 北東から



2 I区 SD30 断面状況 北東から



3 I区 SD30 遺物出土状況 東から



4 I区 SD43 遺物出土状況 北西から



1 II区 1面目遺構完掘状況 北西から



2 II区 基本層序 西壁 東から



3 II区 SP05 断面状況 西から



4 II区 SP13 断面状況 南東から



1 II区 SP02 断面状況 南東から



2 II区 SP03 断面状況 南西から



3 II区 SP04 断面状況 南から



4 II区 SD22・23 断面状況 東から



5 II区 2面目遺構完掘状況 南東から



1 Ⅲ区 Ⅰ面目全景 北東から



2 Ⅲ区 Ⅰ面目全景 北西から



1 III区 SD05 掘削状況 南東から



2 III区 SD05 遺物 (21・26) 出土状況 南西から



3 III区 SD05 遺物 (25・20) 出土状況 北東から



4 III区 SD05 断面状況 南東から



5 III区 SD05 遺物 (23) 出土状況 南西から



6 III区 SD08 断面状況 北東から



7 III区 SD07 遺物 (28) 出土状況 南東から



1 III区 SH02 完掘状況 東から



2 III区 SP06 断面状況 東から



3 III区 SP07 断面状況 東から



4 III区 SP08 断面状況 東から



5 III区 SP10 断面状況 東から



1 IV区 全景 北東から



2 IV区 全景 西から



3 IV区 SD11 遺物出土状況 北西から



4 IV区 SD11 断面状況 北東から



1 V区 全景 南東から



2 V区 基本層序 西壁 東から



3 V区 SD47 掘削状況 南西から



1 V区 SD47 断面および耳環出土状況 南西から



2 V区 SD47 耳環 (128) 出土状況 南から



3 V区 SD47 石製模造品勾玉 (127) 出土状況 南から



4 V区 SD47 遺物出土状況 南から



5 V区 SD47 遺物出土状況 西から



6 V区 SD47 須恵器甕 (124) 出土状況 南から



7 V区 SD47 遺物出土状況 南西から



1 V区 SD47(B) 断面状況 西から



2 V区 SD47(A) 断面状況 西から



3 V区 SD45 土師器片出土状況 北東から



4 V区 SD45 断面状況 北東から



5 V区 SD45 掘削状況 北東から



1 V区 SK36 土師器甕(61)出土状況 西から



2 V区 SP83 断面状況 西から



3 V区 SP83 土師器甕出土状況 西から



4 V区 SP83 土師器甕出土状況 南から



5 V区 SK18 土師器高坏(54)出土状況 西から



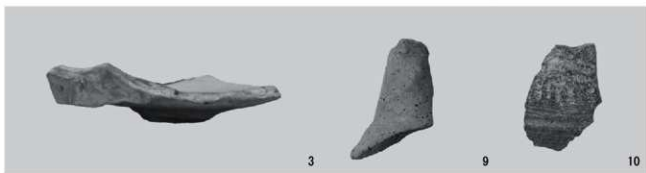
6 V区 SD74 断面状況 西から



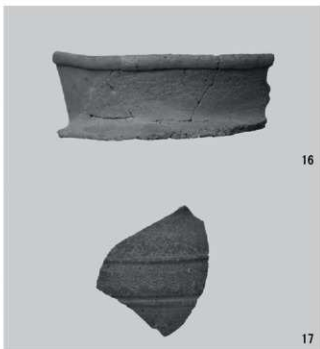
7 V区 SD74 完掘状況 南から



I区 出土遺物 1



I区 出土遺物 2



II区 出土遺物 1



20

Ⅲ区 出土遺物 1



21



22



28

Ⅲ区 出土遺物 2



25



29



26

23

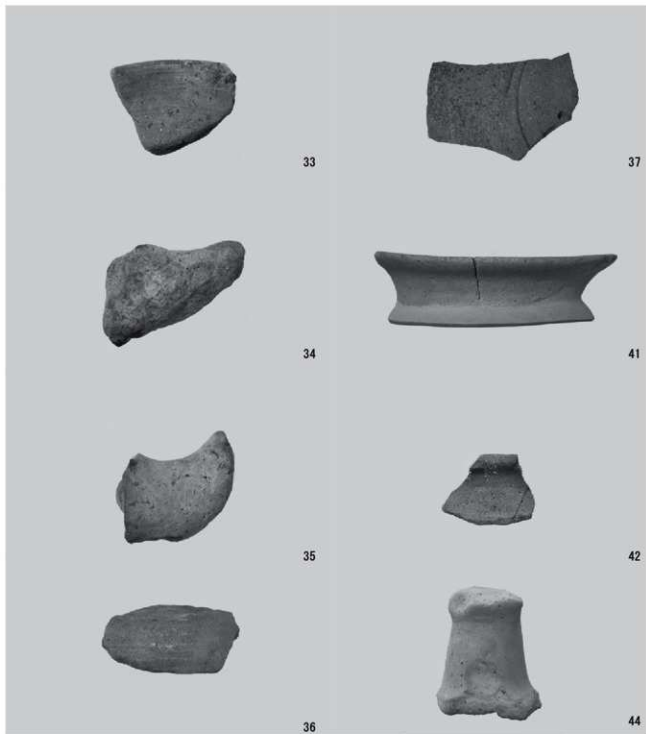
27

31

Ⅲ区 出土遺物 3



V区 小穴・土坑出土遺物 1



V区 小穴・土坑出土遺物 2



49

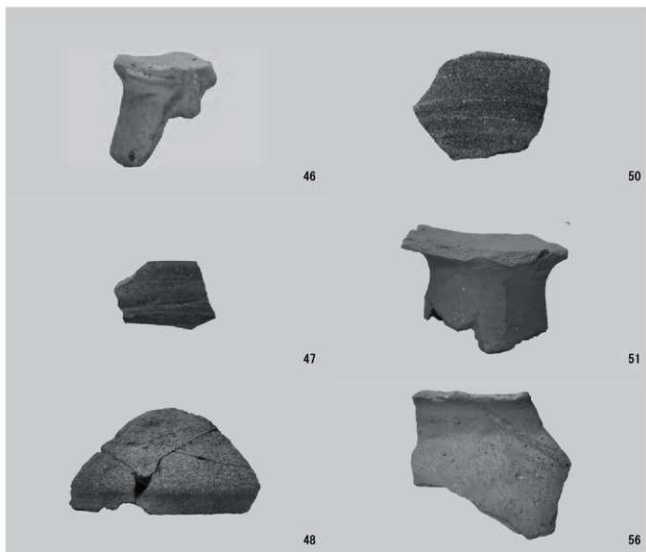


52



54

V区 小穴・土坑出土遺物 3



46

50

47

51

48

56

V区 土坑出土遺物 1

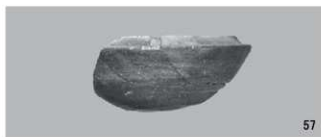


61

V区 小穴・土坑出土遺物 2



64



57



59



58



60

V区 小穴・土坑出土遺物 3



65

V区 SD47 出土遺物 1



67



70



84

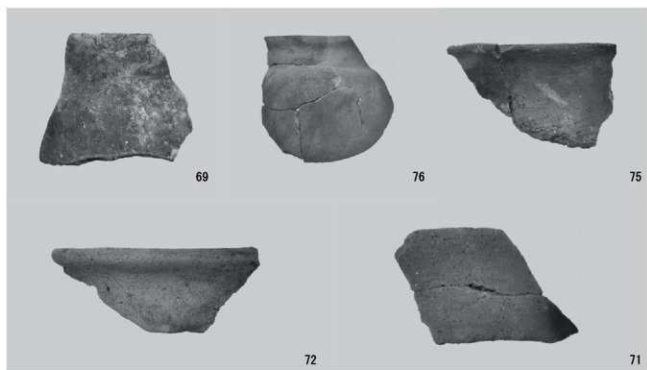


80



79

V区 SD47 出土遺物 2



69

76

75

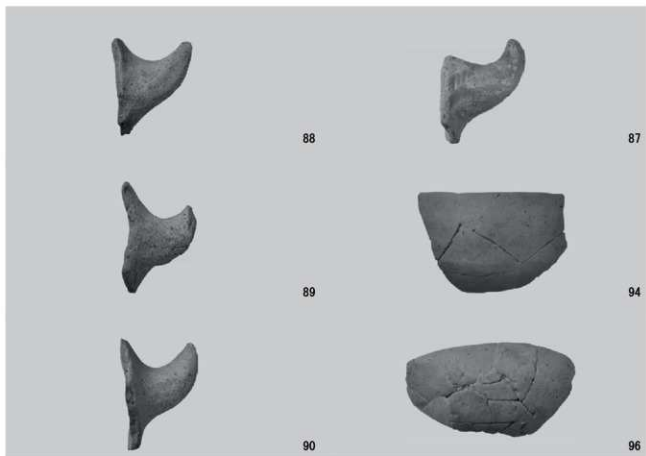
72

71

V区 SD47 出土遺物 3



V区 SD47 出土遺物 4



V区 SD47 出土遺物 5

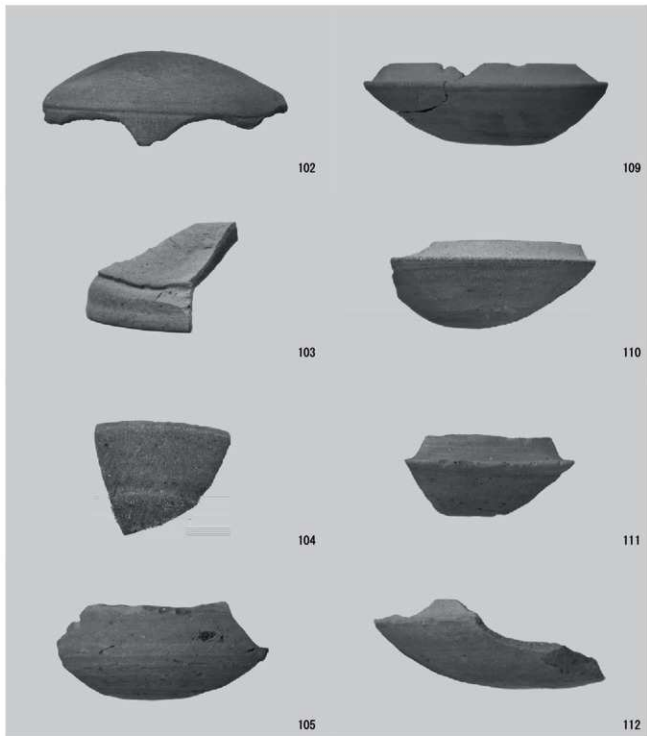


106



115

V区 SD47 出土遺物 6



102

109

103

110

104

111

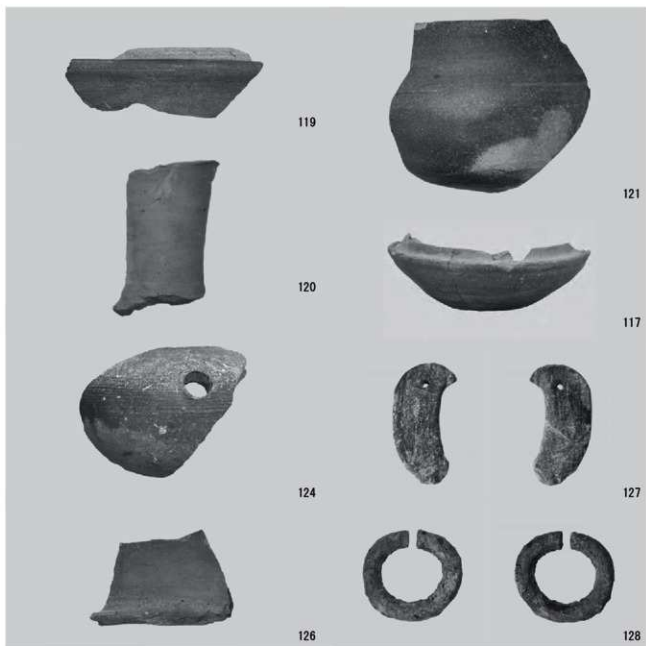
105

112

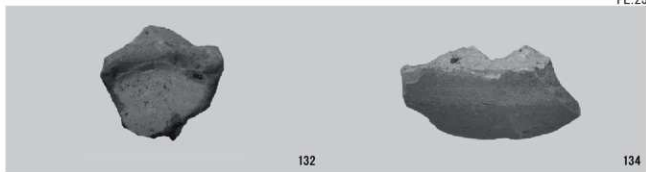
V区 SD47 出土遺物 7



V区 SD47 出土遺物 8



V区 SD47 出土遺物 9



132

134

V区 SD52・SD56 出土遺物

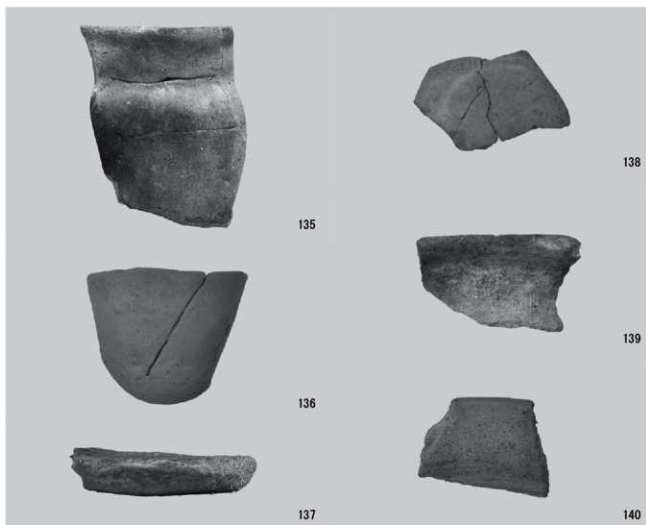


149



151

V区 遺構外出土遺物 1



135

138

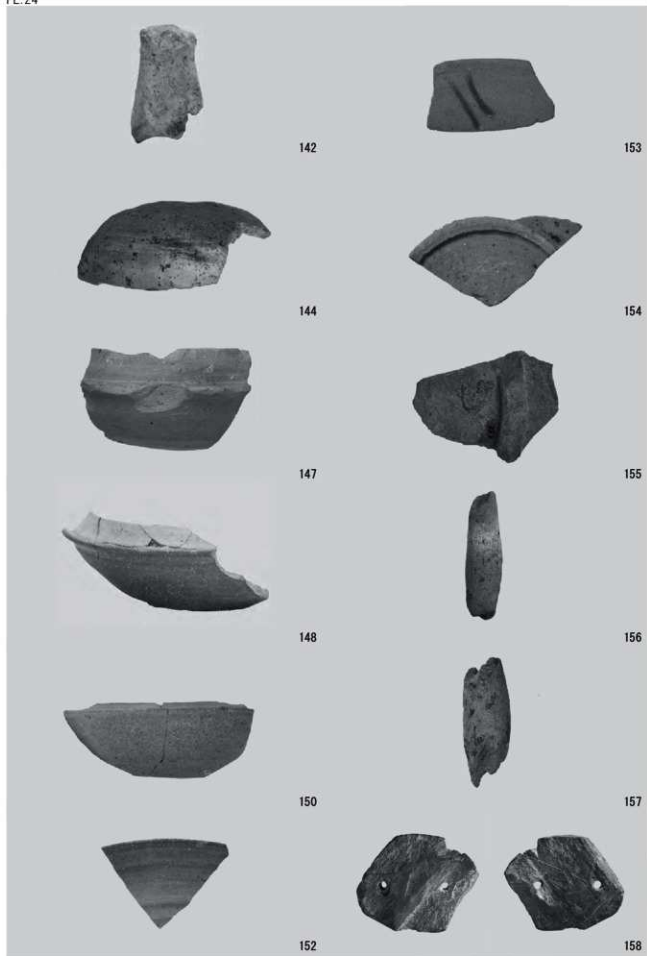
136

139

137

140

V区 遺構外出土遺物 2



報告書抄録

書名（ふりがな）		恒武西宮遺跡 6（つねたけにしみやいせき）						
編著者名		安孫子雅史（編）、山中美歩、萩原美香						
編集・発行機関		浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-0946 浜松市中区元城町103-2 TEL(053)457-2466 FAX(053)457-2563						
発行年月日		2018年10月30日						
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つねたけにしみやいせき 恒武西宮遺跡	静岡県 浜松市 東区 恒武町	22132	2-02-12	34度 45分 31秒	137度 47分 32秒	2017年12月11日 ～ 2018年3月16日	1704㎡	物流センター 新築工事に伴う 埋蔵文化財 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
恒武西宮遺跡	集落跡	古墳時代		掘立柱建物 溝 土坑 小穴		土師器 須恵器 土製品 石製模造品 （勾玉・双孔円板） 金銅製品（耳環）		古墳時代後期を中心とする遺構面では、並行する溝を3条を確認。その溝間には掘立柱建物を確認。溝を中心に土師器・須恵器、石製模造品・金銅製品が出土。中でも、下層遺構として遺物を伴わない南北方向の溝を確認したことが特筆される。
要約	<p>恒武西宮遺跡は、天竜川の堆積作用によって形成された沖積平野の中でも東を南流する豊田川、西を南流する安間川に挟まれた微高地に位置する遺跡である。株式会社スズケイの物流センター新築に伴って行われた試掘確認調査（17次）において、遺物とともに遺構の存在が確認されたことから記録保存を目的とした本発掘調査（21次）を実施するに至った。</p> <p>今回の調査により、古墳時代後期の遺構と豊富な遺物が出土した。この時期の遺構として並行する3条の東西溝を確認した。ここから、石製模造品・耳環・土師器・須恵器が出土した。これらの溝は過去の調査においても確認している。また、これらの溝に先行する1条の南北溝を確認した。この溝から遺物の出土はなかったが、並行する土坑から有稜高坪が出土することから古墳時代前期にまで遡る可能性がある。</p>							

恒武西宮遺跡 6

2018 年 10 月 30 日

編集・発行機関 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)

印 刷 三星商事印刷株式会社

Tsunetake-nishimiya Site

The 21st Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
In Western Shizuoka, Japan



October,2018

Hamamatsu Municipal Board of Education